

## 2. 炭窯 (第66~67図)

第1次調査区B～D-41～45グリッドにかけて検出された。窯は3基が重複しており、第2、3号炭焼窯の焚口の一部から灰原にかけては調査区域外に位置している。以下、各窯別にその概要を述べる。

### 第1号炭窯

B～C-41～43グリッドに位置し、燃焼部は第2号炭焼窯を切って構築されている。窯体西側は第13号溝に切られており、また中央部には、東西に走る擾乱を受け、窯体は南北に分断されている。

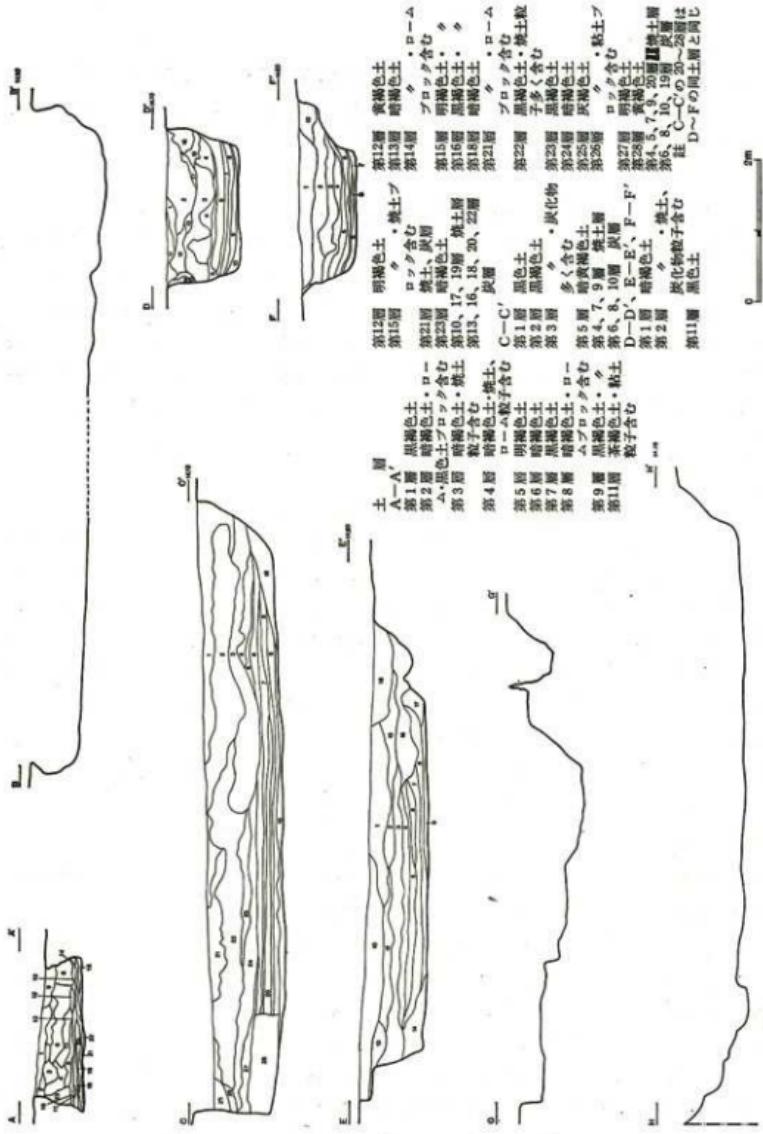
主軸はN-3°-Eである。形態は燃焼部で「く」字状にくびれ、窯体部は長方形を呈する。第2号窯との切り合いのため、全長は判然としないが、7m程度を測るものと思われる。窯体の幅は最小2.6m、最大3.7mを測り、窯底部は確認面から内側に最大0.7m掘り込まれ、オーバーハングを呈している。窯体中央部から先端部にかけて起伏が多く、ゆるやかに傾斜し、先端部はオーバーハングして立ち上がる。燃焼部は「く」字状に屈曲している。炭化物と焼土層が互交に4層づつ確認された。数次に亘る利用が考慮される。

### 第2号炭窯

B～D-43～44グリッドに位置し、第3号炭窯とは燃焼部で重複し、窯体中央部は第1号炭窯の構築に際して燃焼部に用いられ、第2号炭窯長軸の土層堆積には第1号炭窯の灰をかき出した痕跡が認められた。燃焼部の大半は調査区域外に位置している。窯体は推定で、長さ20m前後を測ると思われる。最大幅は窯体中央部やや東側で5.2m、最小幅は第3号炭窯と重複した燃焼部で推定2.0mを測ると思われる。底部は燃焼部から窯尻部に向かってゆるい傾斜をもって立ち上がり、窯尻部壁面は急角度に立ち上がる。最深部は燃焼部からやや焼成部寄りで1.3mを測る。主軸はN-4°-Eである。第1、2号炭窯に接してN-10°-Eに主軸をもつ溝が検出されている。幅2.3m、最深部は確認面から0.63mを測り、溝の接する部分の窯底部との比高差は0.25mを測る。あるいは炭窯と関連した水抜き的な性格をもっていたことも考えられる。第2号炭窯は炭化物、焼土層が互層的に堆積しており、数次に亘る利用が考慮される。

### 第3号炭窯

B～D-43～44グリッドに位置する。主軸はN-89°-Eである。燃焼部で第2号炭窯と重複している。窯体の長さは推定18mを測る。燃焼部は「く」字状に屈曲し、長径2.8m×短径1.6m、底部からの深さ0.3mの不整形の掘り込みをもつ。窯は最大幅4.4m、最小幅3.2mを測る。窯底部は起伏が顕著で、燃焼部は階段状に傾斜をもって掘り込まれている。窯尻部は階段状の立ち上がりをもつ。焼成部は底部がレベル差なく窯尻部に続いている。第3号炭窯の南側には深さ0.5m、窯底と比高差0.3mを測る溝状の遺構が検出されている。焼土、炭化物の堆積もみられず、炭窯とは断定し難い。なお、第3号炭窯は井戸跡を切って構築されている。井戸跡上層からの遺物(第73図)から推定すれば、江戸時代以降の構築とするのが妥当であろう。覆土は炭化物、焼土層が互層的に堆積しており、数次に亘って利用されたものと思われる。第2、3号窯との先後関係は不明確であるが、燃焼部の状態を考慮すれば、第3→2→1号窯への変遷を考えられる。



第67図 炭窯土層エレベーション

### 3. 土 壤 (第68~69図)

土壤は10基確認された。調査区中央部には検出されず、東側では住居群の中間に構築されていた。土層は第69図に一括して呈示した。

#### 第1号土壤

B—9区に位置し、2号土壤に近接している。長径87cm×短径75cm、深さ32cmの隅丸長方形を呈する。遺物は覆土内から大型破片を含め、少量出土したに過ぎない(第72図1~8)。1~3、5~6は勝坂式に比定される。4は口縁部破片で2本隆帯で「の」字状文が貼付されるものと思われる。隆帯に沿って沈線が加えられている。地文は撚糸Lの横回転施文である。7は交互刺突文をもつ。地文は撚糸の継回転施文。

#### 第2号土壤

B—9グリッドに位置し、1号土壤の西側に近接している。長径51cm×短径30cm、深さ6cmの梢円形を呈する。遺物は復元可能な浅鉢を含め、比較的纏った出土を示している(第72図9~17)。

9は浅鉢形土器で、口唇下に「の」字形の隆帯文が4単位貼付され、隆帯に沿って部分的に沈線が加えられている。口径13.8cm、推定高9.0cmを測る。10~13は同一個体と思われる。平縁で、口縁に隆帯文をもち、端部は渦巻状になる。隆帯に沿って幅広の爪形文が施文され、二列の鋸齒状沈線が加えられている。14は口唇が強くくびれる。15は浅鉢形土器であろう。口唇下に浅く幅広いナゾリが加えられる。

#### 第3号土壤

E—13~14グリッドに位置する。造構東側は第5号住居跡と重複関係にある。全体の形状は不明だが、長径57cm、短径45cm前後の梢円形プランが推定される。北西壁寄りが深く掘り込まれ、深さは東壁側で10cm、北西壁側で15cmを測る。遺物は出土していない。

#### 第4号土壤

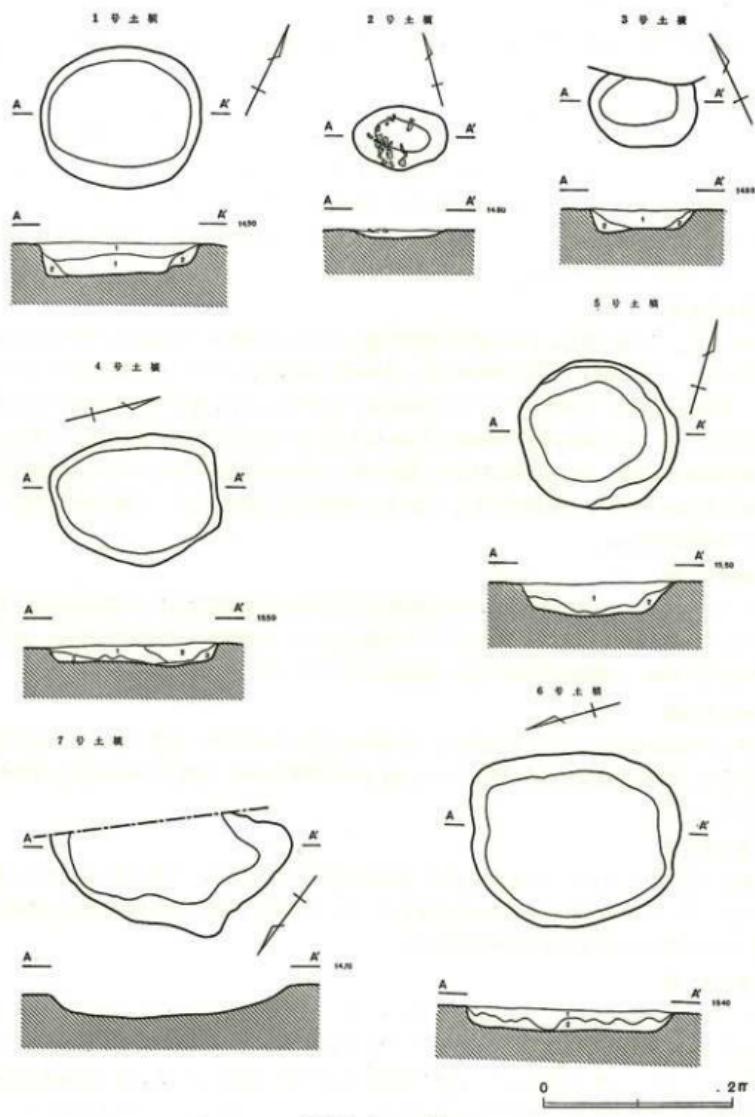
B—12次調査区H—5グリッドに位置する。長径90cm×短径74cmを測り、東壁の張り出した長方形を呈する。床面は北壁寄りが若干窪んでいる。深さは南壁側で8cm、北壁側で15cmを測る。遺物は出土していない。

#### 第5号土壤

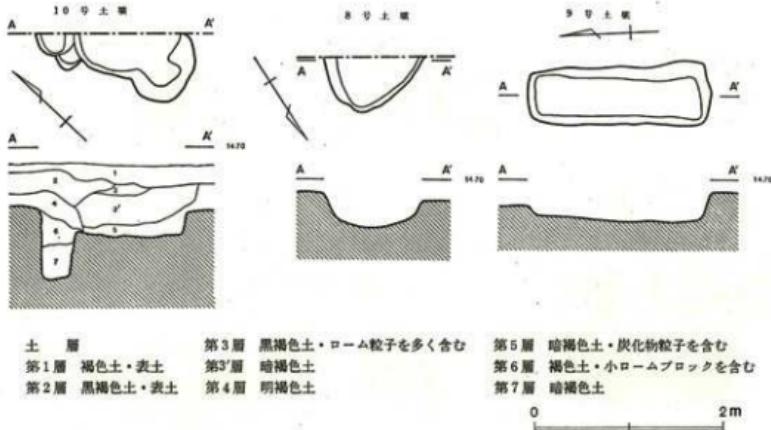
B—12次調査区H—11グリッドに位置する。径90cm前後の円形を呈する。中位に緩い段をもつ。床面は中央部に向かって緩く起伏しながら傾斜する。壁立ち上がりは東側でゆるやかである。遺物は覆土中に土器細片が含まれていたのみである。

#### 第6号土壤

B—12次調査区G—7グリッドに位置し、南東コーナー部で第4号溝と接する。長径11.1cm×短径90cm、深さ10cmを測り、西壁が張り出した長方形を呈する。床面は平坦である。遺物は全て覆土内からの出土である(第71図18~21)。18は山形突起を呈し頂部は双頭状となる。頂部に偏平な隆帯が貼付され、刻目をもつ。半載竹管による有節繩文をもつ。5は平縁で、口唇下に窓状区画文をもつ。21は円筒深鉢形土器で、胴上部の文様帶は沈線による半隆起帶で描出される。胴下半の地文



第68圖 土 據



第69図 土 溝

は縦文 R L の横回転施文である。

#### 第7号土壤

第1次調査区 B—36グリッドに位置する。造構東側は調査区域外に在り、全体の形状は不明である。搅乱のため、立ち上がりが部分的に不明瞭である。調査部分内では南北径が68cmを測り、長方形プランが推定される。床面は平坦で、遺物は覆土内から勝坂式の小破片が出土した程度である。

#### 第8号土壤

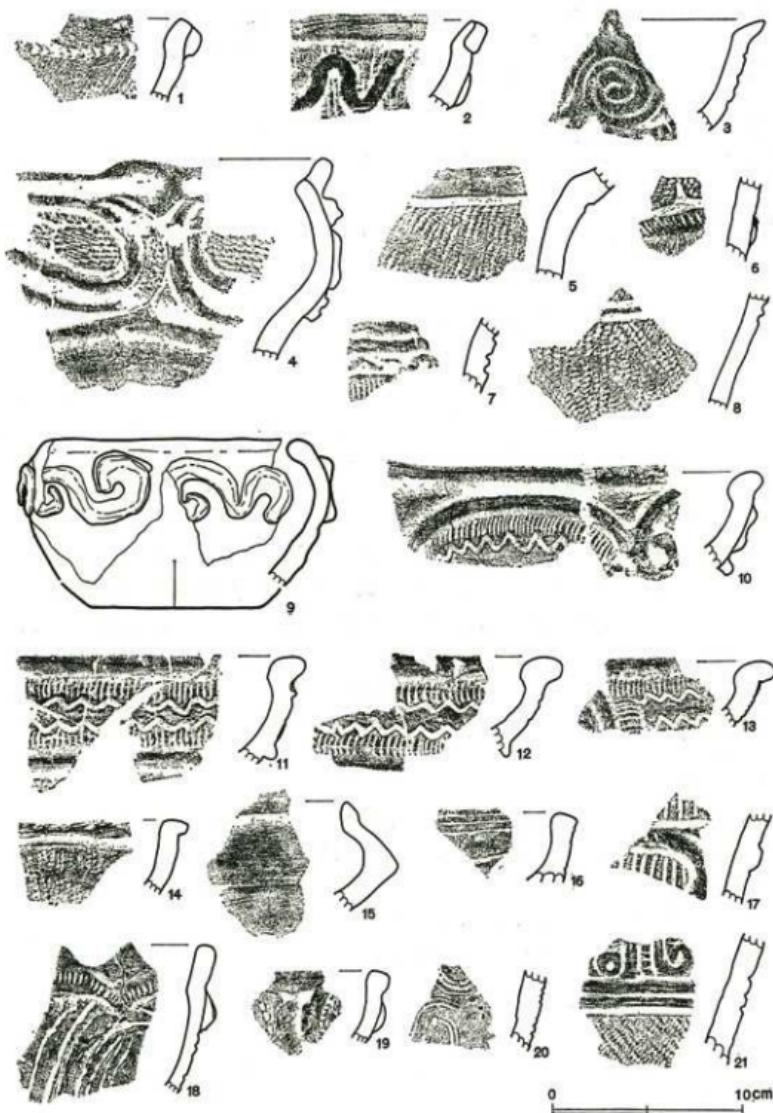
第1次調査区 E—38～39グリッドに位置する。造構西側が調査区域外に在る。平面形から2基の土壤の重複と思われる。北側はピットに切られている。床面は凹凸をもち、確認面からの深さは12cm程度である。遺物の出土はない。

#### 第9号土壤

第1次調査区 C—50グリッドに位置する。造構北側は調査区外となり全形は不明である。深さは確認面から18cmを測り、中央部に向かい緩く傾斜している。

#### 第10号土壤

第1次調査区 C—37グリッドに位置し、北側は第10号溝に切られている。長径101cm×短径36cmの長方形を呈し、床面は南壁側に緩く傾斜している。



第70圖 土壤出土土器

#### 4. 井戸跡 (第72~73図)

第1次調査区C—44グリッドに位置する。造構東側は第3号炭焼窯に切られている。平面プランは椿円形を呈し、長径1.5m×短径1.25mを測る。井戸跡は開口部に向って確認面から1m程下部で開き気味に立ち上がり、以下はほぼ垂直に落ち込んでいる。底面まで完掘し得なかったが、確認された土層は以下の通りである。

第1層 明褐色土・黒色土・ローム土をブロック状に含む。

第2層 黒色土・砂粒を少量含む。

第3層 黒褐色土・ロームブロック・砂粒を含む。

第4層 明褐色土・ロームブロックを多量に含む。

第5層 暗褐色土・ロームブロックを含む。

第6層 茶褐色土・ロームブロックを含む。水分多く含む。

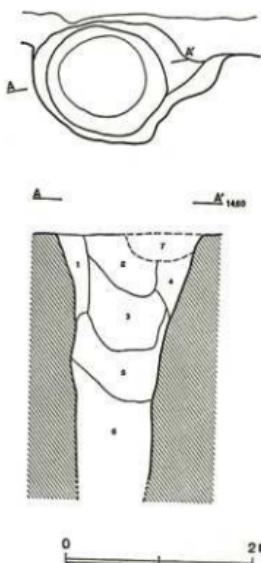
第7層 暗褐色土・砂混り、大小のロームブロックを含む。第3号炭焼窯覆土。

遺物は第3層中から陶磁器類が、第5層中から丸瓦破片が出土した。また第6層中からは井戸枠に用いられたと思われる木片が出土しているが、小片で一点のみの出土であり詳細を明らかにすることはできなかった。

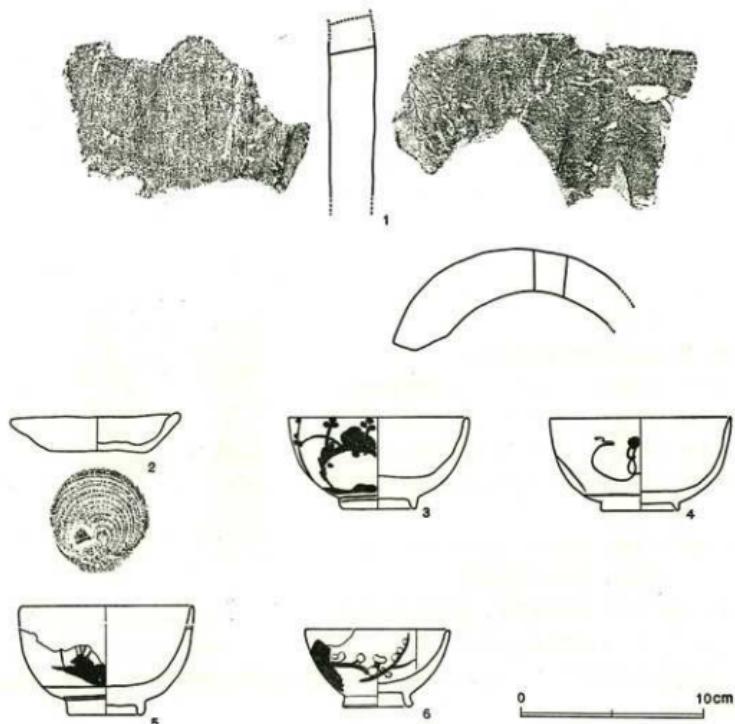
第73図に出土遺物を一括示した。1は第5層より出土した丸瓦破片である。釘穴をもち凹面には目の細かい布目痕をもつ。凸面は繩タキ後、丁寧にヘラ削りが施されている。側縁部は凹面側が切られている。厚さは1.8cmを測り、焼成は軟質で灰白色を呈する。

2は第3層から出土したかわらけである。口唇は肥厚し、内面底部に凹凸をもつ。底部は糸切り底である。灰色を呈し焼成は軟質である。灯明皿と思われる。口径9.3cm、器高1.8cmを測る。

3~6は第3層出土の陶磁器碗である。3~5は磁器、6は陶器である。3~4は有田産と思われる染付け丸碗で草花文をもつ。5は器内外に貫入が入る染付け丸碗で、高台内面に「大明年製」のくづれた文字をもち、内面に離れ砂が付着している。6は陶器で、磁器を模倣したものと思われる。白色の碗がかかり、化粧土と、黒色碗で白梅の文様を描いている。法量は3が口径10cm、器高5.4cm、4が口径10cm、器高5.4cm、5が口径10cm、推定器高6cm、6が口径8.1cm、器高5.2cmを測る。



第72図 井戸跡



第73図 井戸跡出土遺物

## 5. 溝

溝は計13条検出された。第4号溝を除き、形態も単純で掘り込みも浅く、覆土も單一のものがほとんどで時期的に不明瞭なものが多かった。

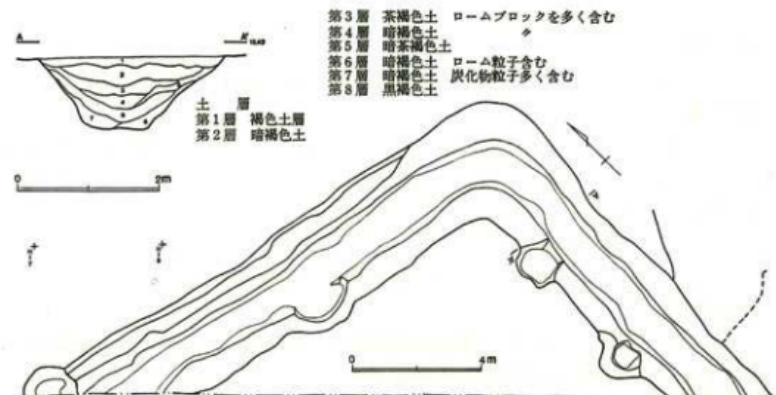
### 第1号溝

E～I-12～14グリッドに位置し、第5号住居跡を切っている。F-13～14グリッドでクランク状に屈曲する。幅80～110cm、深さ60cmは前後を測る。時期不詳。

### 第2号溝

F～H-10～11グリッドに位置し、H-12グリッドで第12号溝と接する。「コ」字状に屈曲する。幅80～120cm、深さは40cm前後を測る。時期不詳。

### 第3号溝



第73図 第4号溝

H-1～6グリッドに位置する。先端部のみで、幅60～145cm、深さ20cm前後を測る。

#### 第4号溝

G～I-3～9グリッドに位置する。最も形体の整った溝で、G-5区で「く」字状に屈曲する。中段にくびれをもち所謂「薬研堀」状を呈する。第14号住居跡を切って構築されている。覆土は8層から成る。幅は2.6～3.4m、底面では1m前後、深さは1m前後を測る。遺物は土器の細片が混入していた程度である。

#### 第5号溝

H～I-14～18グリッドに位置する。平面形は弧状を呈し、幅0.5～1.2m、深さ0.3m前後を測る。時期不詳。

#### 第6号溝

B～E-32～35グリッドに位置し、2条併走の掘り込みが直線的に伸びる。6A号溝は6B号溝を切って構築されている。幅は1.2m～2.6m、深さは6A号溝で0.4～0.45m、6B号溝で0.24～0.3mを測る。

#### 第7号溝

B～E-35～36グリッドに位置し、直線的に伸びる。搅乱によって部分的に失われている。幅は0.5m前後、深さ0.2m程度を測る。

#### 第8号溝

D～E-34～35グリッドに位置し、第6、7号溝と重複する。西壁は立ち上がりが不鮮明である。深さは5cm程度と極めて浅い。

#### 第9号溝

D～E-36グリッドに位置し、第7号溝から派生する。幅0.5m、深さ0.2m前後を測る。

#### 第10号溝

B～E-37～39グリッドに位置し、直線的に伸びる。第8、9号土壤を切っている。幅0.3～0.4

m、深さ0.2m前後を測る。

#### 第11号溝

D-39グリッドに位置し、第10号溝から派生する。幅0.5m、深さ0.2m前後を測る。

#### 第12号溝

C-40、41グリッドに位置し、第13号溝に切られている。中央部で大きく擾乱を受けている。幅1.1m、深さ0.25m前後を測る。

#### 第13号溝

C-42グリッドに位置し、13号溝を切っている。調査区を東西に走る擾乱を受け、第1、2号炭焼窯に切られている。形状は不明である。検出部で幅1.8m、深さ0.3mを測る。

#### 第14号溝

C-D-47~49グリッドに位置し、擾乱が広範囲に及び、断続的に検出された。形状は弧状を呈すると思われる。最大幅1.2m、最深部で16cmを測る。

#### 第15号溝

C-50グリッドに位置し、先端部のみ調査された。幅0.98m、深さ6cmを測る。

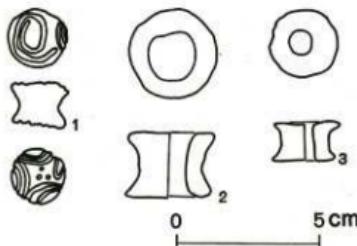
#### 第16号溝

D-E-44~47グリッドに位置する。弧状を呈し、先端部で「く」字状に屈曲する。幅0.6m、深さ20cm前後を測る。

## 6. 土 製 品 (第74図)

出土した土製品は耳栓3点のみで、いずれも遺構内からの出土である。

1は断面滑車形を呈し、両端に沈線で渦巻文、弧線文が描かれている。最大径2.0cm、中央部径1.4cm、高さ1.6cm、重さ0.72gを測る。9号住出土。2は断面滑車形を呈し、中央部に円孔を持つ。最大径3.2cm、孔径1.4cm、高さ2.4cm、重さ15.0gを測る。8号住出土。3は断面滑車形を呈し、一端が大きく外側に突出する。中央部に直線的な孔をもつ。最大径2.4cm、中央部径1.8cm、孔径0.6cmを測る。1号住出土。



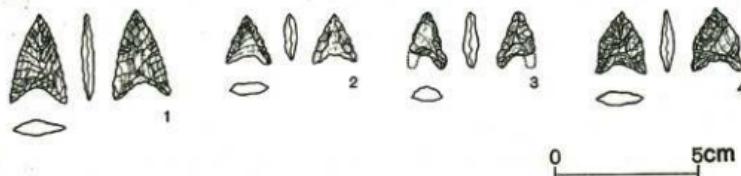
第74図 土 製 品

## 7. 石 器 (第75~80図)

本遺跡から出土した石器総数は76点であった。内訳は石鎌4点、打製石斧52点、磨製石斧3点、スクレイバー1点、磨石5点、石皿6点、蔽石4点、凹石1点でありそのうち34点を図示した。石器は大宮台地の一般的特徴として出土数は少ない。分類別に掲載し、一覧表に法量を示した。

#### A類 石鎌 (第75図)

4点出土した。全て無茎で1は縁辺部が丸味を持つ。1、3は二等辺三角形、2は正三角形を呈する。4は五角形を呈する。1、4は調整剝離が両面に丁寧に加えられ、断面は菱形をなす。2、3は剝離が粗く、主要剝離面を残している。



第75図 石器(1) 石鏃

#### B類 打製石斧 (第77図～第79図 1～4)

1～2、4は片縁が湾曲する。1、2は薄手で片面に自然面を残す。主剝離面を大きく残し、縁辺部には粗い調整剝離が加えられている。4は肉厚で調整剝離は片縁に集中するが粗い。3は基部両面、刃部に自然面が残る。剝離は大きく、刃部から縁辺部に粗い調整剝離が加えられる。5は片縁にゆるい抉入をもつ。片面に大きく自然面を残す。両側縁に磨耗痕が顕著に残る。

第77図6～第78図1～6は両側縁が窪み、刃部が丸味をもって作出され、基部は刃部に比べ小ぶりに作られている。第77図6は片面に自然面を大きく残し、両側縁上部の窪み部には磨耗痕が顕著に残る。基部両側縁は張り出し状に作出されている。第78図1は刃部にかけて薄く、片面に自然面を大きく残す。裏面は主剝離面が大きく残り、調整剝離は抉入部に集中している。刃部は表面に粗い剝離が加えられている。風化が著しい。2～6は基部を欠損している。2は裏面に調整剝離が集中している。3は肉厚で、刃部、両側縁に磨耗が著しい。4は基部で大きくくびれる。中央部から欠損と思われる。裏面の剝離は粗く刃部を中心として調整剝離が加えられる。表面は自然面を大きく残す。5、6は刃部形態に丸味が強く、分銅形を呈する。中央部に抉入をもち、磨耗している。共に表面に自然面を大きく残す。6は裏面に主剝離面を残す。

第78図7～8、第79図1～4は短冊形を呈する。7は調整剝離が粗く、中位から基部上端にまで磨耗が及ぶ。8は片縁に浅い剝離をもち、抉入部が作出されている。肉厚で両面に自然面を持つ、中央部に磨耗が著しい。第78図1～3は表面の剝離は大きく粗い。調整剝離は裏面に集中的に加えられる。1は中央部に磨耗が認められる。

#### C類 磨製石斧 (第78図6～7)

第78図6は始刃を呈し、刃部を除き他は欠損している。大型品であろう。蔽打の後に全面に研磨を加えている。部分的に蔽打痕を残す。縁辺部は面取り状の研磨が施されている。刃部には磨耗がみられる。7は磨切磨製石斧である。片縁には両面から磨切を施し、磨いたと思われる稜を残す。基部、刃部ともに左右両方向からの研磨が加えられている。小型で実用品とは思われない。

#### D類 スクレイパー (第78図5)

梢円形を呈し、左右から大きく剝離が加えられ、横断面は三角形をなす。周縁に細かな調整剝離

が加えられるが、刃部付近に集中し、両側縁の剥離は粗い。D類は1点のみの出土である。

#### E類 磨石（第79図1～3）

第79図1は梢円形を呈し、両面でも中央部に敲打されたような浅い窪みをもつ。表面は共面ともよく磨られているが、縁辺部に磨耗痕は顕著ではない。2は円柱形を呈する。上半及び縁辺の一部が欠損している。下面是平坦で磨耗が著しい。3は偏平な河原石をそのまま用いたものと思われる。全体に磨耗している。

#### F類 石皿（第79図5、第80図1）

第79図5は7号住居跡炉跡内、第9号住居跡床面出土破片の接合したものである。表面は底部近くまでよく磨られており、裏面及び表面の周囲には多くの窪みを有する。残存部位から円形を呈するものと思われる。第80図1は表面が浅く皿状に磨かれている。裏面には断面三角形の窪みが多数穿たれている。两者とも石皿と窪みの両機能を持つが、本項では石皿として分類した。

#### G類 敲石（第78図8～9、第79図4）

第78図8～9は柱状の河原石を打ち欠いて作出されている。8は端部が丸味を帯び、敲打痕をもつ。9は剥離面が全体に磨かれており、縁辺に敲打によって生じたと思われる剥離をもつ。第79図4は磨製石斧欠損品の再利用例である。刃部、基部を欠損している。磨製石斧製作時の敲打痕を顕著に浅す。刃部から斜めに欠損し、端部に敲打痕をもつ。基部の欠損部には再利用の痕跡は認められない。

#### H類 窪み石（第80図2）

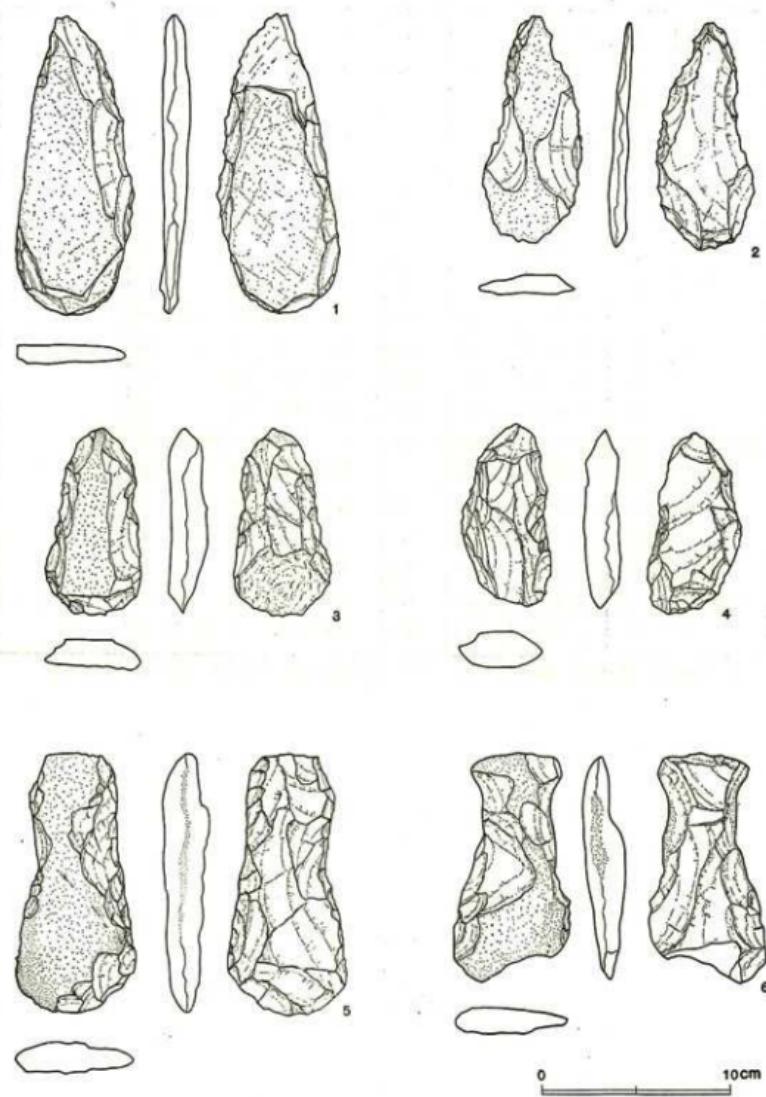
第80図2は偏平な変岩の両面に断面が台形状の窪みをもつ。窪みの大きさはほぼ均一で径2cm程度である。

原 遺 跡 石 器 一 覧 表

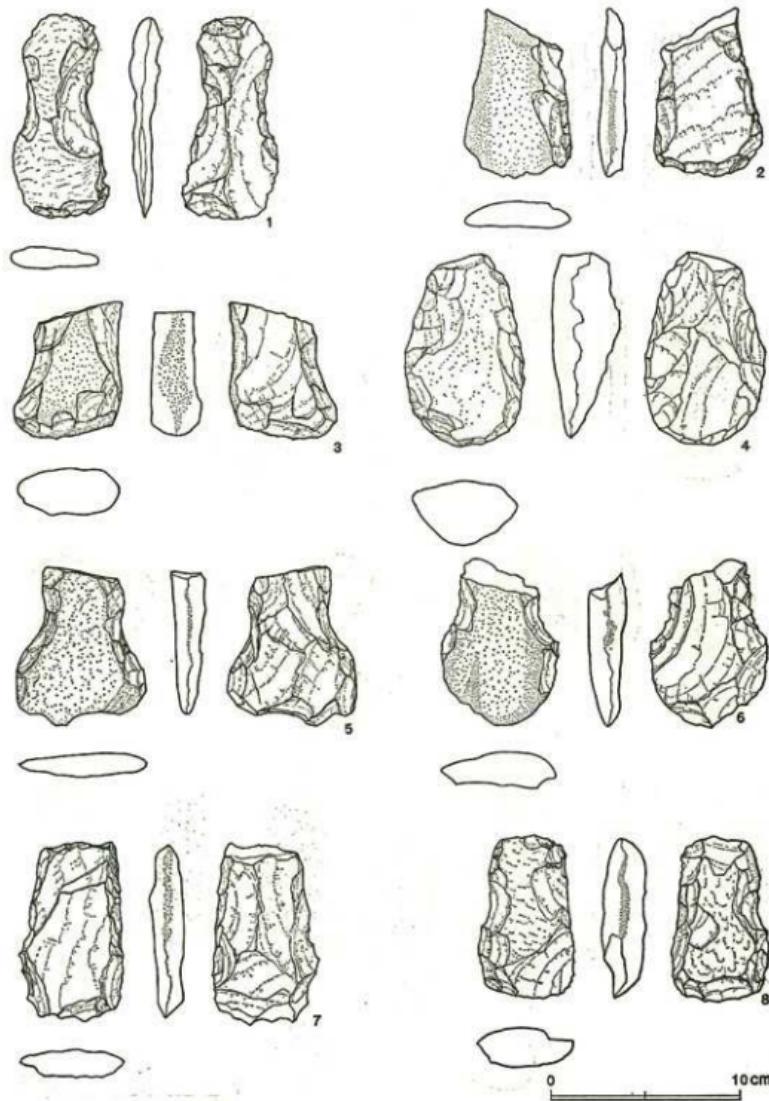
図版番号	分類	出土地点	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 材	備 考
第76図-1	A	3号住	3.2	3.0	0.4	1.3	黒曜石	
	A	9号住	2.4	2.3	0.6	0.6	チサート	
	A	14号住	2.7	2.1	0.6	0.5	黒曜石	
	A	D-23	2.2	2.7	0.5	1.2	黒曜石	
第77図-1	B	3号住	16.1	6.1	1.4	193.0	粘板岩	
	B	9号住	12.2	5.2	1.0	65.1	粘板岩	
	B	C-22	10.0	5.2	1.9	127.2	ホルンフェルス	
	B	H-15	9.8	4.6	1.9	111.4	砂岩	
	B	D-21	14.0	6.3	2.5	237.3	砂岩	
	B	5号住	12.3	6.2	2.1	171.4	砂岩	
第78図-1	B	C-25	10.7	4.7	1.5	73.5	結晶片岩	
	B	D-11	9.0	5.7	1.4	90.4	粘板岩	
	B	C-8	7.3	5.6	2.7	167.7	砂岩	
	B	1号住	10.3	6.2	3.6	247.0	細流砂岩	

図版番号	分類	出土地点	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 材	備 考
第78図—5	B	14号住	8.4	6.8	1.7	110.5	粘板岩	
	B	A—8	8.8	6.3	1.9	119.0	砂岩	
	B	9号住	9.7	5.6	1.7	125.4	砂岩	
	B	B—22	8.7	5.1	2.2	140.4	粘板岩	
	B	F—13	9.2	4.6	2.0	111.8	粘板岩	
	B	C—11	7.2	4.3	1.6	80.2	粘板岩	
	B	4号住	7.3	4.7	1.4	55.5	砂岩	
	B	4号住	6.0	4.5	1.2	61.1	細粒砂岩	再利用品
第79図—1	D	G—5	3.9	3.5	1.8	47.8	砂岩	
	C	1号住	4.9	6.6	2.8	95.8	蛇紋岩	
	C	C—39	6.7	2.3	1.3	34.8	砂岩	
	G	B—9	8.6	4.0	2.9	143.2	砂岩	
	G	5号住	8.7	5.0	3.7	248.0	砂岩	
	E	B—10	10.6	6.9	5.2	536.8	石英安山岩	
	E	5号住	5.4	—	4.9	192.1	砂岩	
	E	4号住	7.2	4.7	16.5	84.2	砂岩	
	C→G	G—10	7.4	5.9	3.6	275.5	安山岩	
第80図—1	F・H	5、9号住	14.8	14.1	8.9	1,559.9	安山岩	
	F・H	9号住	16.9	9.5	6.9	1,084.5	安山岩	
2	H	7号住	20.6	11.0	3.2	1,325.3	結晶片岩	

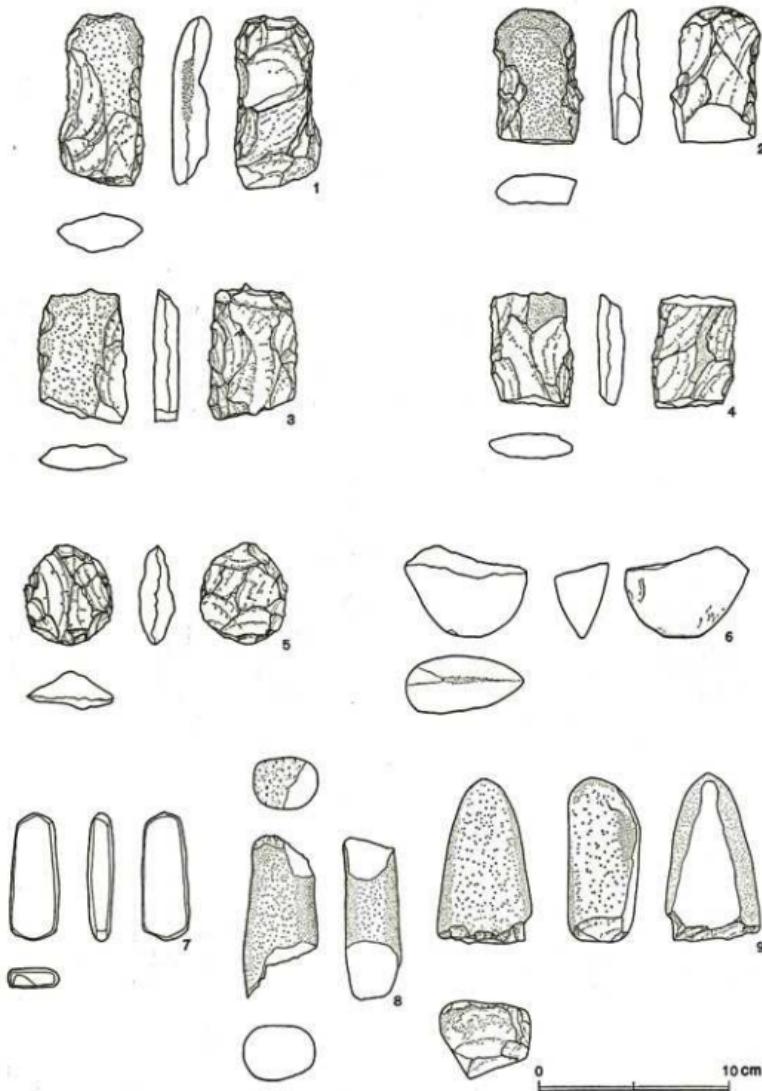
註 石鎌—A 打斧—B 磨斧—C スクレイパー—D 磨石—E 石皿—F 敷石—G 凹石—H



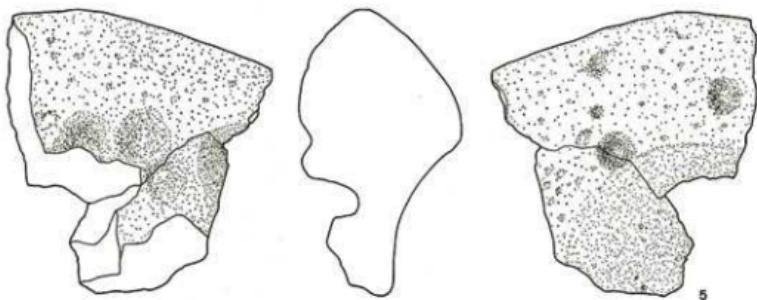
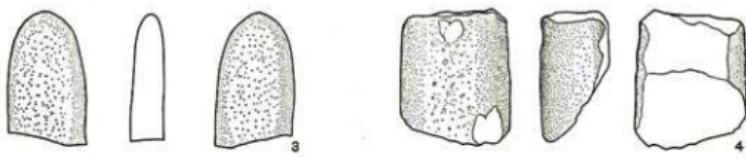
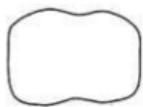
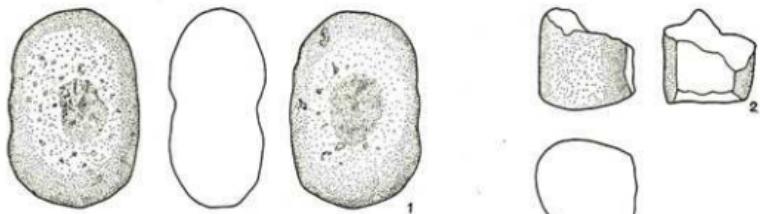
第76圖 石器（2）



第77図 石器(3)

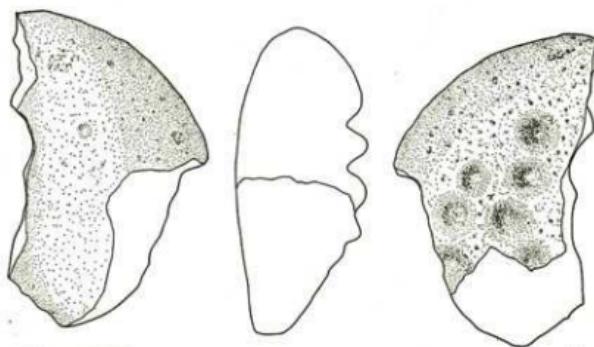


第78圖 石器(4)

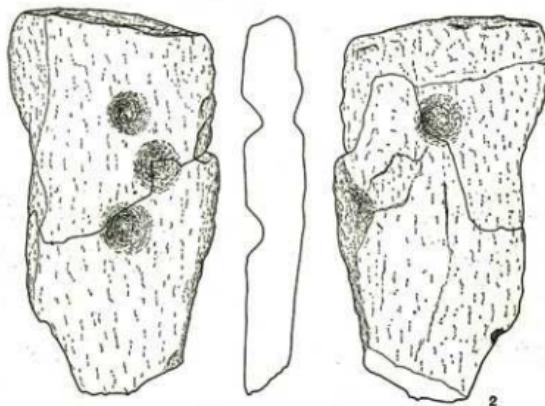
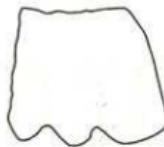


0 10cm

第79図 石器 (5)



1



2



0 10cm

第80図 石器（6）

## V 丸山遺跡の概観

丸山遺跡は、大宮台地の北東縁に沿って南東流する沼落川と綾瀬川によって開析された小室支台の紡錘形台地の南西縁から、原市沼を望む小支谷の低湿地にわたる広範な地域を占めており、県指定史跡である伊奈里敷跡とは直線距離にして約1kmであり間近に望むことができる。

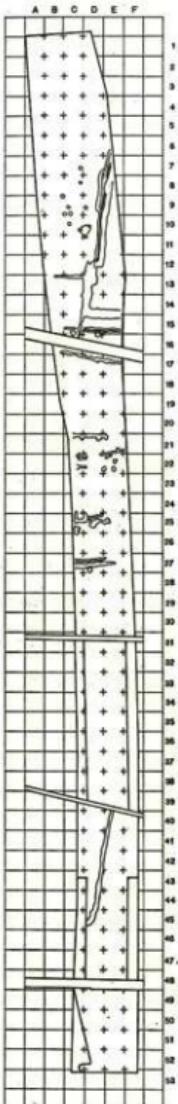
遺跡の標高は、13~15mであり南側に向ってなだらかに傾斜している。水田面との比高差が約2mを測る。台地から低湿地にかけて調査区は800mと長大なため便宜上北側から台地部をA区、台地肩から斜面部をB区、低湿地部をC区と仮称し、さらにC区をI~V区に分けて順次調査を行った。C区さは、I・II区とIII・IV区の2ヶ所を矢板で囲みウエルポイントで強制排水し、雨水を排除するためのテントを架設するような状況であった。

A区からは住居跡1軒、溝10条、土壙13基が検出された。住居跡は平安時代のもので、床面に鉄滓が散在し、竈より羽口が出土しており、製鉄関連の工房跡と考えられる。谷を隔てた西側の台地先端部には製鉄遺跡である大山遺跡が調査されている。直線距離にして1km弱であり、両遺跡との関連が考慮されよう。

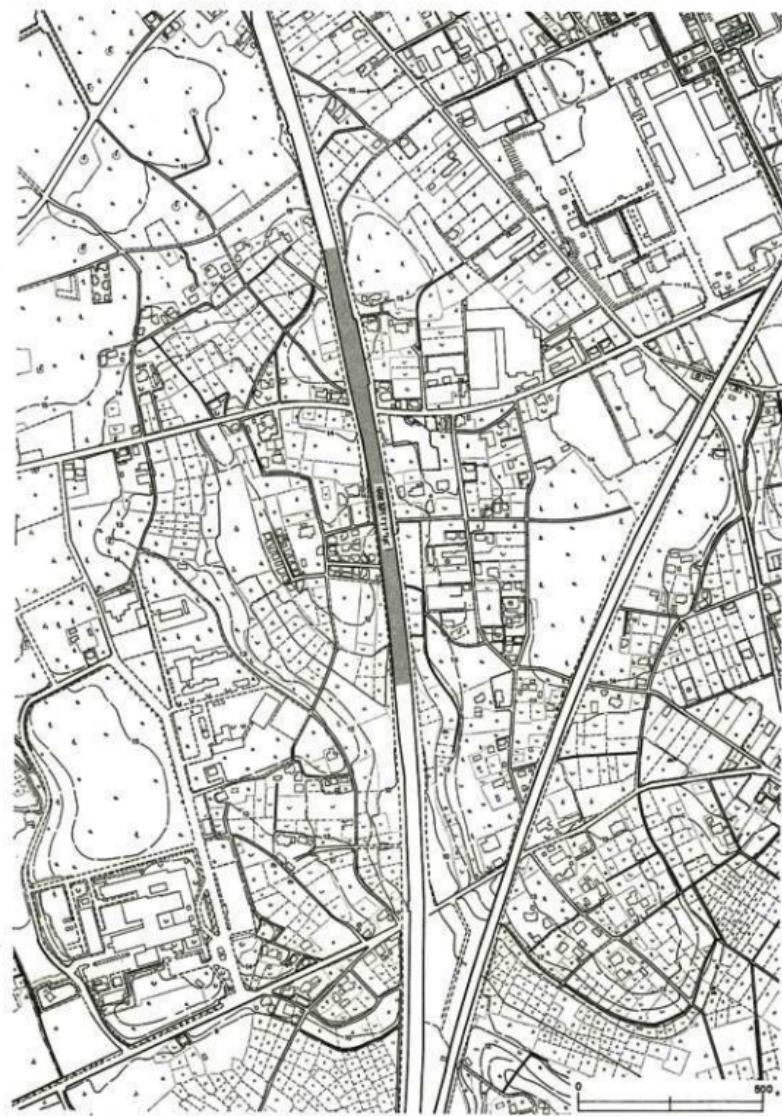
B区は、調査区中央部から南側に傾斜し、台地部では、溝9条、土壙8基、土器溜り1基（安行II式）を検出した。台地肩部からチャート製のフレイク・ポイントが出土している（第103図）。

B区からC区にかけての包含層調査により、いずれも第II、III層から、縄文時代後・晚期。中・近世～近代の遺物が出土した。

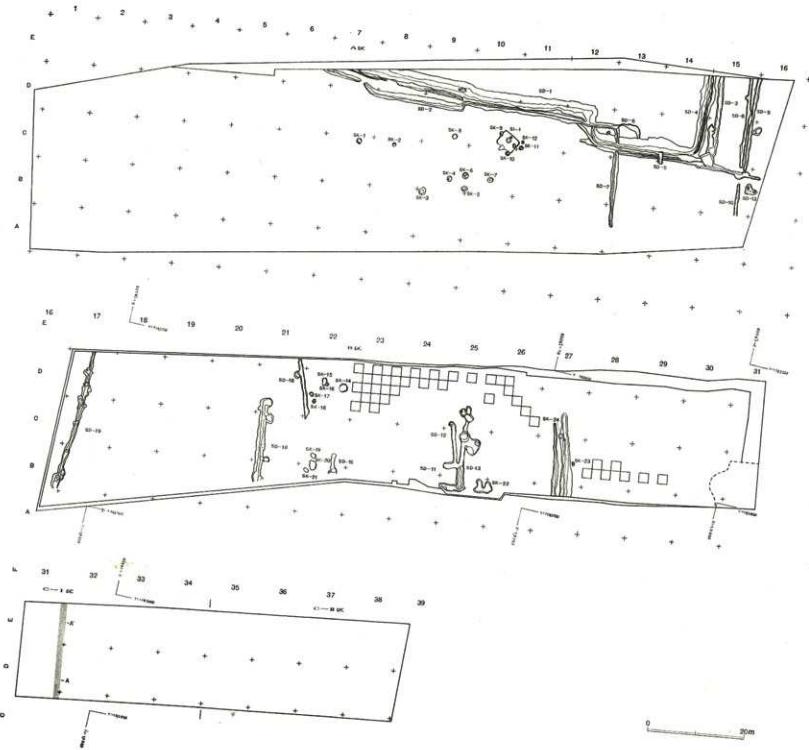
縄文時代晩期の遺物はB区南端からC-I区にかけて比較的多く出土している。後期の遺物はC-II~V区にまとまって出土する傾向を示していた。遺物は台地部からの流れ込みと思われ、B区西側の谷に面して集中する晩期の遺物群と考えあわせると縄文時代中～後期にかけては地点を異にして分布することも考えられる。さらにローム台地から続く旧地形が確認され、遺跡に南から湾入する支谷であることが判明し、西側の台地に営まれた縄文時代集落等からの影響が考えられる。（山本 祐）



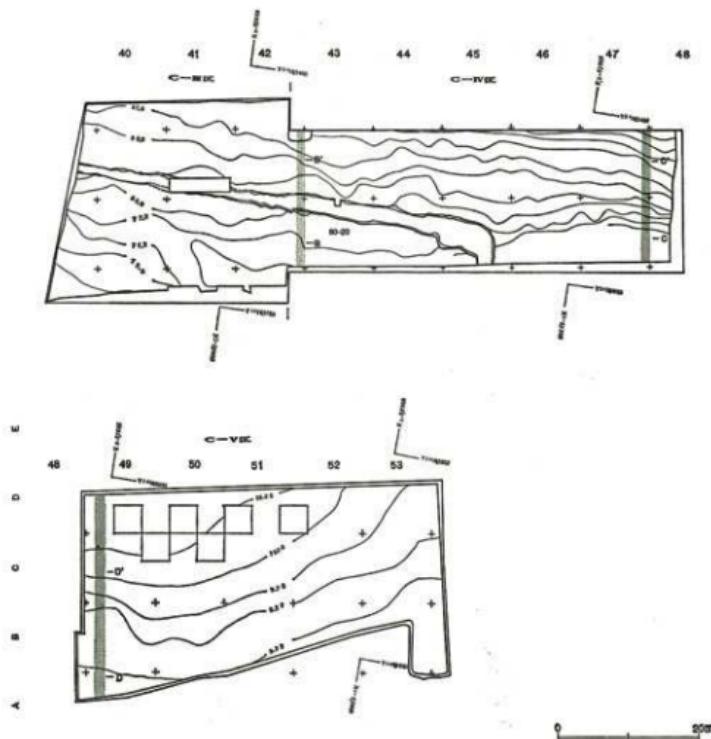
第81図 丸山遺跡グリッド配列図



第82図 周辺の地形図



第83図 A～C区遺構全体図



第84図 C区造構全体図

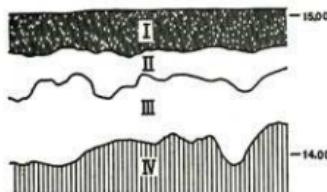
第Ⅰ層 黒色土・表土で腐蝕土を主体とする。

粘性、しまりともに乏しい。遺物包含層もある。

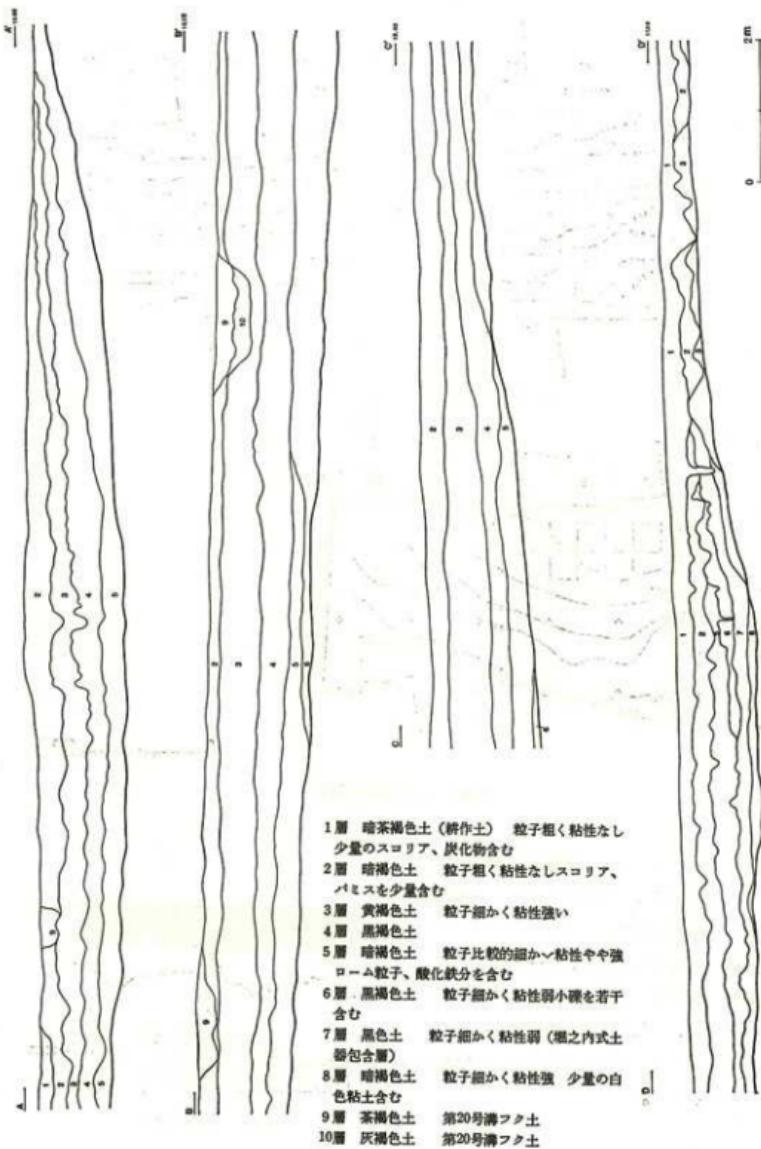
第Ⅱ層 黄褐色土・ソフトローム層。

第Ⅲ層 暗黄褐色土・ハードローム層。スコリア、白色火山灰を少量含む。

第Ⅳ層 淡黒褐色土・第一黑色带、やや褐色味をもつ。



第85図 基準土層



第86図 低地部土層堆積図

## VI 遺構と出土遺物

### 1. 住居跡と出土遺物

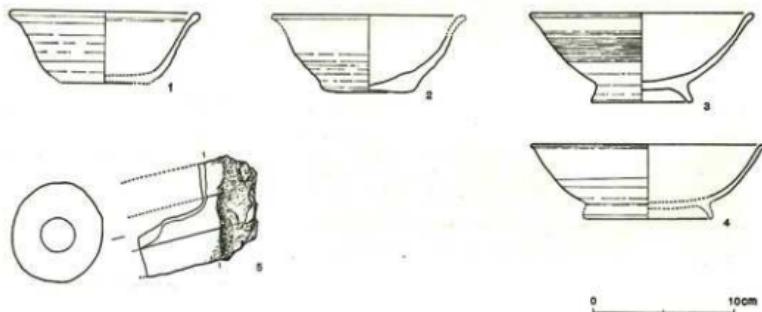
#### 第1号住居跡（第87～第89図）

A区C—10、D—10～11グリッドに位置する。住居跡は溝状に東西に走る擾乱を受け壁の立ち上がりを明瞭に把握できなかった。残存部から推定して、プランは長方形を呈し、規模は長軸4.0m、短軸3.2mを測るものと思われる。カマドを通る主軸はN—66°—Wである。

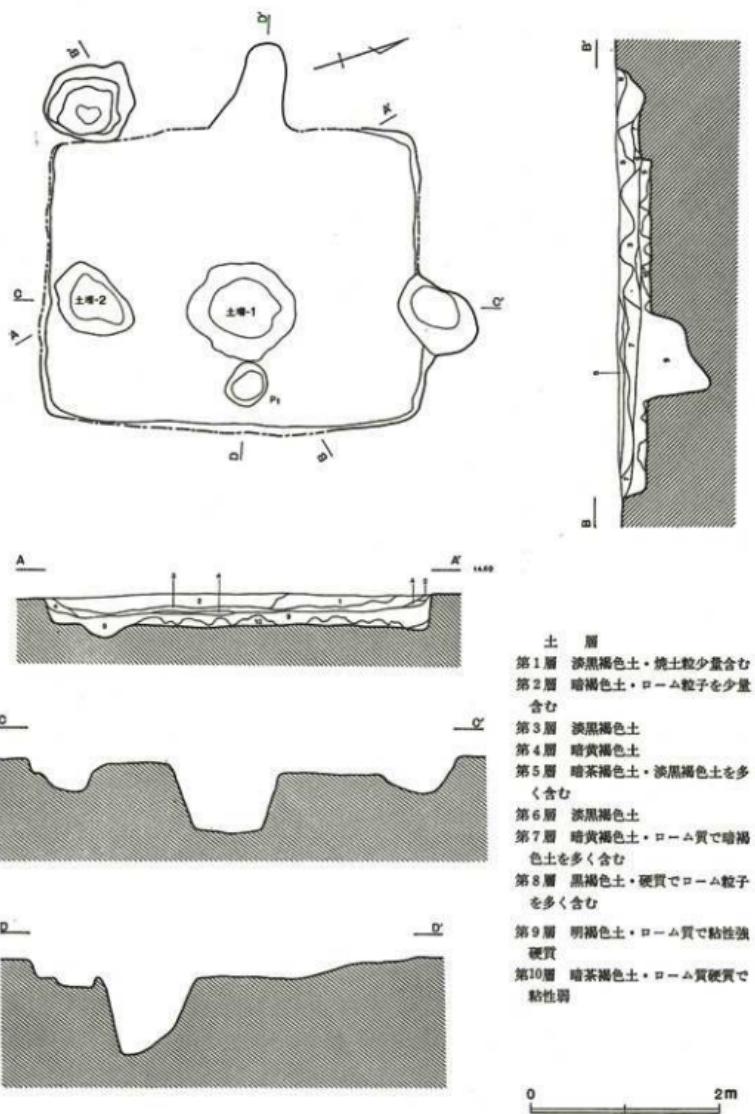
第9号、10号土壇は、住居跡と重複しているが、第1号、2号土壇は住居跡に伴うものである。また、明確な柱穴は検出されなかった。床面には、細かな鉄滓が比較的密に散在していることが確認された。カマドは西壁中央に付設され、擾乱を受けており詳細は不明であるが、覆土内から土器片、羽口が出土している。

出土遺物は、土師器、灰釉陶器であるが、図示できたものは、坏4点である。

1. 口径13.6cmの土師質灰形土器。胎土は軟質で、淡橙色粒子、微砂粒を含む。色調は明褐色を呈し、焼成は良好である。体部は内湾気味に立ち上がり中程より外反し、端部は丸くなっている。整形は内面が横位のヘラ磨き、外面はロクロ痕で下位にヘラ削りがみられる。底部は欠損。
2. 口縁部を欠損し、底径6.0cmの土師質灰形土器。胎土は黒色粒子、微砂粒を多量に含む。色調は明褐色、淡褐色を呈し、焼成も良好である。体部下半はロクロ痕が明瞭で直線的に立ち上がり、中位より立ち上がりはやや急になる。整形は、底部内面は粗いナデで体部との境はなだらかである。外面は糸切りで、他はロクロ痕である。
3. 口径16.1cm、高台径7.3cm、器高6.4cmの高台付坏の内黒土器。胎土は、石英粒微量、微砂粒を含む。色調は、内面は黒色、外面は淡褐色で、焼成も良好である。体部は内湾気味に立ち上がり、



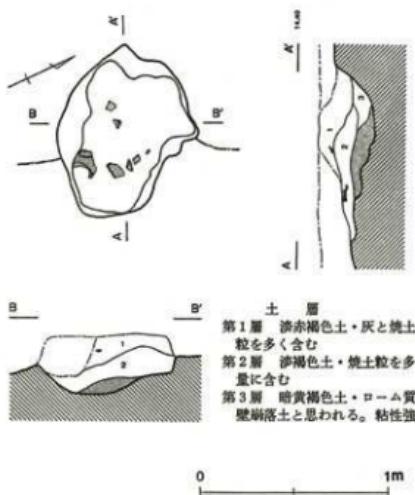
第87図 第1号住居跡出土遺物



第88図 第1号住居跡

端部はやや膨らみ外反し、高台は「ハ」の字形に開く。整形は、体部外面下半は右回転のヘラ削りが施され、中位は明瞭なロクロ痕がみられる。内面はヘラ磨きされており、他はロクロ痕である。

4. 口径16.8cmの灰釉陶器で底部を欠損している。胎土は黒色粒子、微砂粒を含む。色調は、内面は灰釉により淡緑黄色、外面の口縁は内面と同様の釉をかぶっているが他は灰白色を呈し、焼成は堅緻である。体部は内湾し、ゆるやかに立ち上がり、端部は外面に棱をなしそれに括れている。整形は、体部下半は右回転のヘラ削りで、他はロクロ痕である。



第89図 第1号住居跡 カマド

## 2. 土 壤

土壤は22基検出された。位置的にはA区7~11グリッド、B区21~22グリッド、24~25グリッドにかけての3地点に集中的に検出されている。遺構内からは遺物がほとんど出土していないため時期決定はなし得なかった。なお土層は第92図に一括して示した。

### 第1号土壤

A区C-7グリッドに位置する。径54cmの円形を呈する。北側に向かって傾斜し、最深部で24cmを測る。壁に接して長径15cm×短径9cm、深さ20cmの梢円形のピットをもつ。

### 第2号土壤

A区C-8グリッドに位置し、径約50cmの円形を呈する。底面は中央部に向かってゆるく傾斜し最深部で12cmを測る。極めて浅く、壁は一部擾乱を受けており立ち上りが不明瞭である。

### 第3号土壤

C-D-9グリッドに位置する。長径81cm×短径69cmの梢円形を呈する。底面は東側から西側にかけてゆるく傾斜し、最深部で48cmを測る。掘り込みは西側壁が急角度に掘り込まれ、西壁側はややゆるやかである。覆土は5層からなり、西壁際に壁落土と思われるローム土が堆積していた。

### 第4号土壤

A区C-9グリッドに位置する。長径60cm×短径48cmの梢円形を呈する。南壁側に段をもち、底面は平坦である。最深部で23cmを測る。

### 第5号土壤

A区C—9グリッドに位置する。長径60cm×短径41cmの橢円形を呈する。浅く皿状に掘り込まれ、北壁側に段をもつ。立ち上がりは南壁側で急傾斜をなす。底面は中央部で若干盛り上がり気味である。最深部で10cmを測る。

### 第6号土壤

A区C—9グリッドに位置する。径60cm前後でほぼ円形を呈する。掘り込みは南壁側で垂直に掘り込まれ、北側に向かって傾斜が緩く立ち上がりは垂直となる。底面は平坦で、最深部で34cmを測る。

### 第7号土壤

A区C—10グリッドに位置する。径55cm前後でほぼ円形を呈する。底面は橢円形状に一段深く掘り込まれている。深さ20cmを測る。

### 第8号土壤

A区D—9グリッドに位置する。径50cmの円形を呈する。深さは8cmと極めて浅い。底部は平坦で中位にピットをもつ。

### 第9号土壤

A区D—10グリッドに位置し、第1号住居跡を切っている。長径45cm×短径36cmの不整橢円形を呈し、最深部で20cmを測る。

### 第10号土壤

A区C—10グリッドに位置し、第1号住居跡を切っている。長径50cm×短径39cmの不整橢円形を呈し、底面はゆるく段をもって落ち込む。最深部で18cmを測る。

### 第11号土壤

A区D—11グリッドに位置し、長径45cm×短径30cmの不整橢円形を呈する。底面は中位で一段落ち込みをもつ。最深部で12cmを測る。

### 第12号土壤

A区D—11グリッドに位置する。長径30cm×短径20cm、深さ9cmの不整橢円形を呈する。

### 第13号土壤

A区C—16グリッドに位置し、2基の土壤の重複である。13A号土壤は長軸をE—4°—Wに、13B号土壤はN—85°—Eにもつ。13A号土壤は13B号土壤を切って構築されている。13A号土壤は長径106cm×短径66cm、13B号土壤は推定長径120cm×短径58cmを測る。深さは13A号土壤で44cm、13B号土壤で49cmを測り、13B号土壤は東壁が擾乱により一部不明瞭となっている。

### 第14号土壤

B区D—22グリッドに位置する。長径48cm×短径36cmの橢円形を呈し、底面は中央部で若干盛り上っている。最深部で20cmを測る。

### 第15、16号土壤

B区D—22グリッドに位置し、15号土壤は主軸をN—14°—Eにもつ。16号土壤を切って構築されており長径75cm×短径45cmの長方形を呈し、底面は凹凸をもち、深さ17cmを測る。16号土壤は全

形が不明だが長径60cm前後×短径32cm程度の長方形を呈ものと思われ、深さは7cmを測る。

#### 第17号土壙

B区D—22グリッドに位置する。長径48cm×短径33cmの椭円形を呈する。底面は凹凸をもち深さは19cmを測る。

#### 第18号土壙

B区D—22グリッドに位置する。長径45cm×短径32cmの椭円形を呈し、底面は一段深く掘り込まれている。最深部で12cmを測る。

#### 第19号土壙

B区C—22グリッドに位置する。長径64cm×短径44cmの椭円形を呈する。底面は東側にゆるやかに傾斜する。最深部で11cmを測る。

#### 第20号土壙

B区B～C—22グリッドに位置する。長径90cm×短径60cmの長方形を呈し、北東コーナーが突出している。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。底面は皿状に掘り込まれ、最深部で24cmを測る。

#### 第21号土壙

B区B—22グリッドに位置する。長径56cm×短径38cmの椭円形を呈する。底面は平坦で、壁は垂直に掘り込まれ、深さ20cmを測る。

#### 第22号土壙

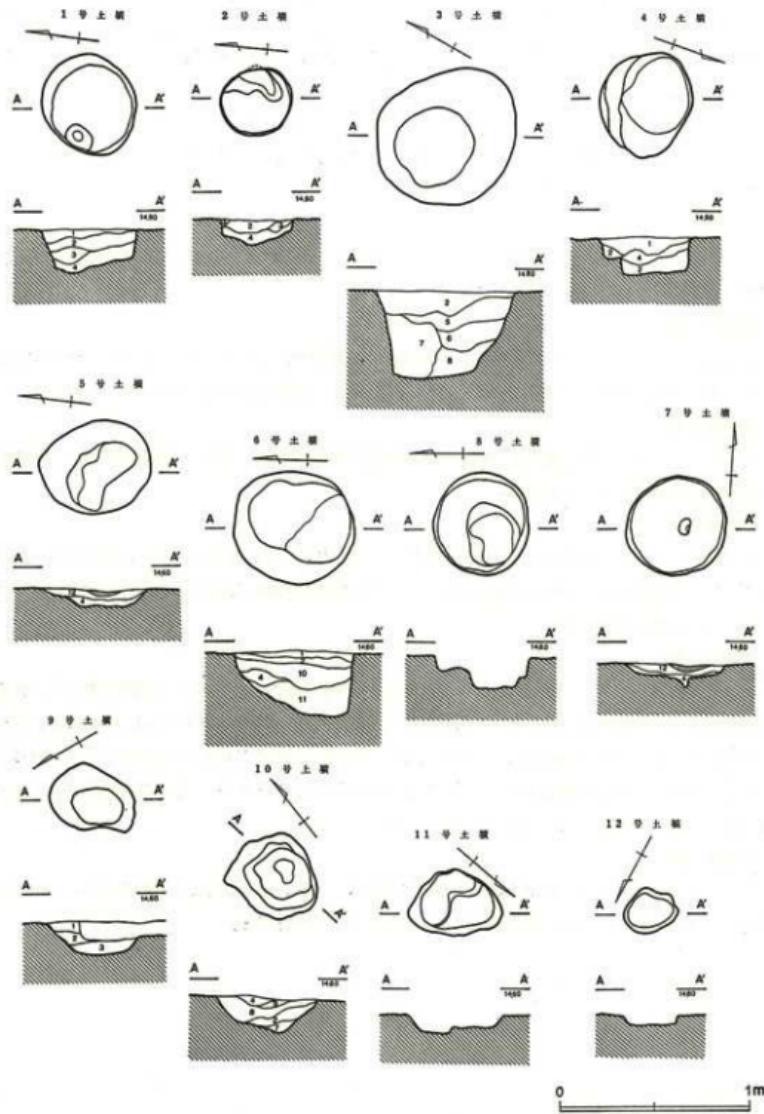
B区C—25グリッドに位置し、第13号溝に切られている。2基の重複（22A、22B号土壙）からなり、22A号土壙は径約50cm、深さ22cm、22B号土壙は径約60cm、深さ26cmを測る。前後関係は22A→22B号土壙と思われる。

#### 第23号土壙

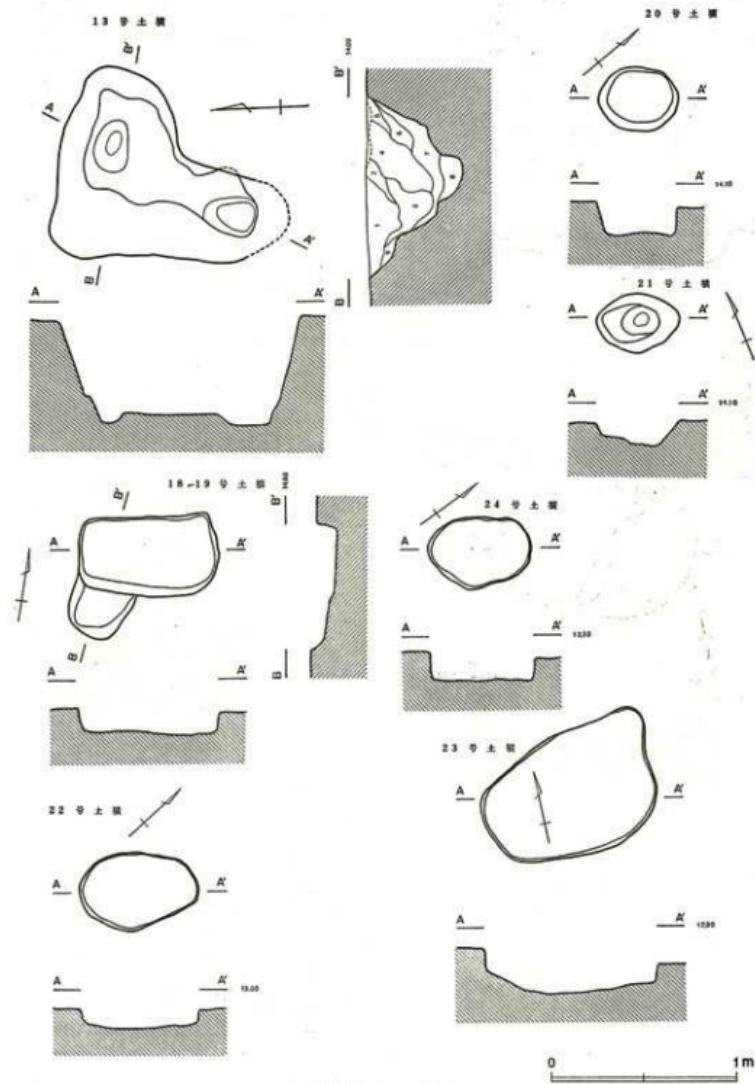
B区B—25～26グリッドに位置し、調査区中最も南側に位置する。3基の土壙の重複と思われるが前後関係は不明確であった。推定径は、22A号土壙の長径約120cm×短径54cm、深さ27cm、22B号土壙が長径約120cm×短径66cm、深さ30cm、22C号土壙は長径約170cm×短径50cm、深さ40cmの長方形を測ると思われ、主軸は各々N—3°—E、N—81°—E、N—88°—Eを測る。遺物は覆土内から縄文式土器の細片が出土している。

#### 第24号土壙

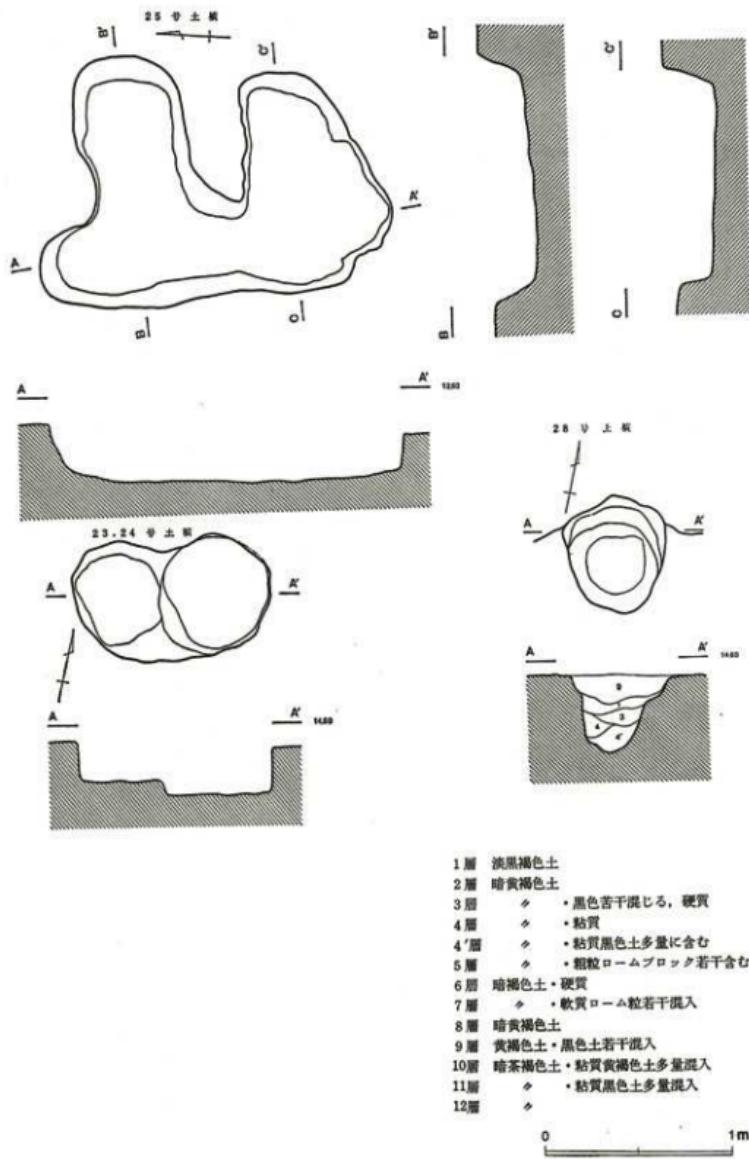
B区D—25グリッドに位置する。第12号溝に切られている。径55cm前後の円形を呈し、上位で段をもち、東壁側はややゆるい掘り込みをもつ。最深部で54cmを測る。



第90図 土 壤



第91図 土 塗



第92図 土溝

### 3. 溝

溝は20条検出された。調査区を東西に横走するものが大部分で、形状を把握し得るものは少ない。掘り込みも全体的に浅く、遺物も図示し得る資料は出土していない。時期的には不明確で、根切り溝、あるいは地境の溝が大部分と思われる。

#### 第1～9号溝

調査区を南北に縱走する1、2、5、6号溝と、それらに接し東西に走る3、4、7～9号溝を一括して説明する。形状から地境の溝と思われる。1号溝はC～E～6～16グリッドにかけて座標南北方向に調査区を縱走する。D～12グリッドでクランク状に屈曲する。南に移行するにつれ幅狭くなっている。底面は概ね平坦で最大幅3.1m、確認からの深さは平均30cmを測る。2号溝は1号溝と併走し、D～E～6～9グリッドでは1号溝から若干離れて構築されている。最大幅1.9m、最深部で15cmを測る。3、4号溝はD～14グリッドで1号溝と接する。座標東西ラインに沿って調査区内を横走する。3号溝は最大幅2.9m、平均約2m、深さ25cm前後を測る。4号溝は幅1.1m～1.9m、深さ15cm前後を測る。5号溝はC～D～13～16グリッドに位置し、1号溝と併走する。幅0.9m～1.2m、深さ13cm前後を測る。6号溝はD～13グリッドで屈曲する。7号溝は1、2、6号溝と接し、B～D～13グリッドに位置し、座標東西ラインに沿って調査区を横走する。幅0.6m～1.35m、深さ10cmを測る。8、9号溝はD～E～15グリッドに位置し、座標東西ラインに沿って調査区を併走する。8号溝は幅0.5～1.0m、深さ15cm前後を測る。9号溝は幅0.35m～0.8m、深さ10cm程度である。10号溝は8号溝と対応し、幅0.5～0.75m、深さ14cm程度を測る。

#### 第11～13号溝

B区B～D～25グリッドに位置する。11号溝は12、13号溝に接し南北に横走する。幅1.2m、深さcmを測る。12号溝は11号溝と接し、N～42°～Eをもって調査区を東西に走る。幅0.7m前後、深さ約10cmを測る。13号溝は座標東西ラインに沿って調査区内を走る。先端部、中央部に擾乱を受けている。調査区西壁寄りで「く」字状にくびれる。幅1～1.2m、深さ15cm程度を測る。

#### 第14、15号溝

B～D～27グリッドに位置する。両溝ともN～43°～Eをもって調査区を東西に走る。14号溝は幅0.6m～2.1m、深さは平均30cmを測る。15号溝は14号溝の南側に位置し、幅0.3m～0.9m、深さは20cm前後である。

#### 第16号溝

B～C～22グリッドに位置する。先端部のみ調査された。西壁寄りに擾乱を受けている。幅0.7m前後、深さ約16cmを測る。

#### 第17号溝

B～D～21グリッドに位置し、N～45°～Eをもって調査区を東西に走る。樹木による擾乱を受けており、壁は不明瞭な部分がある。幅1.7m、深さ25cm前後を測る。

#### 第18号溝

C～D～21～22グリッドに位置し、N～38°～Eをもって調査区を東西に走る。幅0.6m、深さ

mを測る。

#### 第19号溝

B～D-17グリッドに位置し、座標東西ラインに沿って調査区を走る。溝は底面に小ピットを有する。幅0.5~1.0m、深さは底面まで35cm、ピットは更に20~28cm程度掘り進められている。

#### 第20号溝

C-I、N区D～E-46グリッドに位置し、D-45グリッドで「く」字状に屈曲する。本地区は低地部にあたり第一回2～3層中にかけて掘り込まれている。近世の所産と思われ、覆土内には丸太状の木材が検出されている。幅0.6m～0.8m、底面までの深さは最深部で20cmを測る。

## 4. グリッド出土土器

丸山遺跡から出土した縄文土器は前期を除く早期から晩期までに及ぶが、後、晩期が主体を占める。出土地点はB区南端の斜面部からC区の低地部にかけてであり、A、B区の台地平坦部からはほとんど出土していない。出土状態は極めて散漫で、低地部では第5、6層中から出土している。分類は以下の通りである。

第1群 縄文早期に属するもの 第2群 縄文中期に属するもの 第3群 縄文後期前半に属するもの 第4群 縄文後期後半～晩期に属するもの 第5群 粗製紐線文系の土器群  
尚、便宜上、出土遺物はB区とC区を分けて説明する。

#### B区出土土器

##### 第3群土器（第94図1～12）

###### A類（1～2）

隆帶上に押圧をもつ。口頸部破片で、胴部はR Lの縄文地文上に沈線文が描出されるものと思われる。

###### J類（3、11～12）

狭い併行沈線内に縄文を施文した帯状文をもつもの。沈線内の隆起は低い。3は器面上に押圧の加えられた突起をもつ。器面上にR Lの縄文が施文されている。11～12は沈線内がやや隆起し、L Rの縄文が施されている。文様部以外は丁寧にナデられている。

###### K類（4～9）

平行沈線を基調とした文様をもつもの。4は小突起をもつ。8は横位に廻る平行沈線を、縦の短沈線で分割している。沈線内には4～6に縄文L Rが、8～9には縄文R Lが充填されている。7は沈線内に右傾する細密沈線が充填されている。

##### 第4群土器（第94図13～23、第96図1～3）

###### A類（13～18）

帯状文系の土器を一括した。帯状部は幅狭で沈線が併走する。帯状部の接する部分には所謂「ブタ鼻」状の粘土瘤が貼付される。13～15は波状口縁、16～17は平縁を呈する。13、16は帯状部に細かい刻目が施される。14、15はR Lの縄文が施文される。15、16は口唇上に突起をもつ。17は口唇に粘土瘤が貼付される。地文はR Lの縄文である。

**B類 (19~20)**

口唇が肥厚し、口唇上はナデられ平坦面をもつ。器面は平行沈線文が基調で、口唇上、沈線内に19はR L、20はL Rの繩文が横位施文されている。

**C類 (21)**

沈線で曲線的な文様が描出されるもの。口唇は肥厚し、口唇上に小突起をもつ。沈線内にはR Lの繩文が充填施文されている。

**D類 (22)**

平行沈線文と沈線内が印刻されるもの。1例のみの出土である。刻目をもつものともたない沈線が重複し、更に空白部に印刻が施される。器面はナデられ滑沢味を帯びる。

**E類 (第94図23~第95図1~3)**

弧状、入組状の沈線文をもつもの。口縁部は大きく開き、口頭くびれ部に平行沈線が廻る。文様描出には単沈線、平行沈線の二者があり、平行沈線内に刺突をもつものがある。全体に白色味が強い。

**第5群土器 (第95図4~19)**

**B類 (4~6)**

口縁が内傾し、口唇内面がゆるく肥厚する。口唇上には連続刺突が加えられ、器面は単位の密なハケ目状工具で縱位にナデられている。

**C類 (8~14)**

口縁が内渦し、口唇は外方に肥厚する。口唇下に鋭い沈線が廻り、口唇上には連続刺突が加えられている。器面には斜位に粗い掠度をもつ。

**D類 (15~16)**

口縁は内傾し、口唇内面にゆるく肥厚する。口唇上及び胴上半部に断面カマボコ形の隆帯が貼付され、隆帯上には丸棒状工具で押圧が加えられている。器面には横位にゆるく弧を描く擦痕をもつ。器厚は薄手である。

**E類 (17~18)**

口唇断面形はC類に近似し、口唇に貼付された隆帯上には押圧が加えられる。口唇下には平行沈線で弧状の文様が描かれる。17は沈線内にL Rの繩文が粗く充填されている。17は沈線が細く、18、19は沈線が太く浅い。

**C区出土土器 (第96~102図)**

**第1群土器 (第96図1~4)**

C区30~33グリッドで集中して出土した。同一個体と思われる。1は口縁部破片である。口縁は直線的に開き、口唇上に刻みをもつ。内外面に貝殻条痕施文後、器面に併行沈線で幾何学的モチーフが描かれる。沈線内には刺突が加えられている。2~3は胴部破片である。内外面に貝殻条痕文をもつが、内面は浅い。4は底部近くと思われ、器厚は厚めでゆるく湾曲する。全体に黒褐色を呈し、纖維を含む。器厚は0.4~0.6cmを測る。

## 第2群土器（第96図5～14、第97図1～10）

### A類（第97図1～5）

懸垂文磨消文をもつ一群を一括した。全て胴部破片である。1、2は地文に撲糸Lが密に施され、蛇行する懸垂文をもつ。4は縄文RLの縦回転施文を地文にもち、平行沈線による懸垂文をもつ。沈線内は磨消されている。3、5は地文をもたず、細い併行沈線による懸垂文をもつ。3は沈線内に櫛状工具による押引文が施文されている。5は懸垂文内は半載竹管によって斜位沈線が施されている。

### B類（第96図9）

無文口唇部直下を廻る沈線に接して併行沈線が垂下するもの。器形は口縁部が外反気味で、垂下する沈線は横帯区画文内を分割することも考えられる。地文は縄文RLの縦回転施文で、沈線内は磨消されている。

### C類（第96図5～8、10～14、第97図8～9）

曲線的な沈線文をもつ一群を一括した。文様は「匂」字形や、波状の連続文様が推定される。1は波状口縁を呈する。口縁に沿って沈線が廻り、沈線下には波状沈線文が描出されている。11、14は平縁で、5と同様のモチーフ構成をとるものと思われる。10は口唇に沈線区画された無文部をもち、沈線下には刺突が加えられている。12、13は「匂」字形に沈線が施文されている。12は2本、13は単沈線で幅が狭く沈線頂部は鋭角を成す。7、8は文様は不明であるが本類に含めた。8は沈線下に2種類の縄文で羽状に施文している。地文は5～7、10～11、14が縄文RL、8、13はRLとLR、12は付加条縄文RL+Lである。第98図8は対向する「匂」字状沈線文をもつ。地文は縄文RLである。9は口頭部破片と思われる、刺突をもつ平行沈線下に「匂」字状沈線文と、端部が渦巻く沈線文を併せもつ。空白部は磨消されている。地文は縄文RLである。

### D類（第97図6～7、10）

上記以外の土器を一括した。6は重弧文系、7は連弧文系土器である。6は斜位に沈線が施されている。口縁部破片と思われる。7は地文に撲糸Lをもち、2～3条の併行沈線による連弧文をもつ。10は器面に不規則な櫛齒文をもつ。

## 第3群土器（第93図1、第96図15～17、第97図11～13、第98図～第100図）

### A類（第93図1、第97図11～13、第98図1～6）

縄文地文上に沈線文をもつものを一括した。第94図1は、器面が4単位分割されるものと思われる。口頭部に2段に隆帯が貼付され、隆帯上には斜位の押圧が施されている。口唇部の突起は中央部に沈線と端部に円形刺突をもつ。胴中位に最大径をもつ。胴部文様は平行沈線文で、沈線内は磨消されない。地文は縄文RLの縦回転施文である。推定口径20.6cm、胴部最大径28.3cm、現存高21cmを測る。第98図11は口唇が鋭角をなし、口縁部に沈線が廻る。12～13は同一個体と思われる。口頭部でゆるくくびれ、隆帯が廻るか剥落している。隆帯上には斜位の押圧が加えられている。口唇は無文で直線的に開く深鉢形を呈する。胴部は平行沈線文で、沈線内は磨消されている。地文は縄文RLの斜位回転施文である。第99図1は蕨手状懸垂文をもつ。地文は縄文RLが不規則に施文される。4は第95図1と同一個体と思われる。5は蛇行懸垂文をもつ。

#### B類（第98図5）

波状口縁をなし、波頂部と胸部を偏平で両端に刺突をもつ隆帯で連結する。胸部は波状部を中心として弧状沈線が重疊して施される。

#### C類（第98図11～12）

11は三角形の区画内に蒙手状モチーフが描かれている。12は綫に垂下する平行沈線で器面分割され、区画内を三角形の対向する連続モチーフをもつ。器面に繩文が部分的に施されている。

#### D類（第100図1～2, 4）

器面が突起を中心として分割されると思われる一群である。1～2、4は地文をもたず器面は丁寧にナデられている。1、2は突起をもつ。1は粘土瘤状、2は棒状粘土をねじったような状態を呈している。1は直線的な沈線、2は曲線的な沈線文をもつ。

#### E類（第100図3）

隆帯で器面分割されるもの、隆帯上には斜位に押圧が密に加えられている。平行沈線が基調となる。器面は丁寧にナデられ光沢を帯びている。

#### F類（第99図1～15）

口唇、胸部に文様帶をもち、文様が全て沈線で展開され器面に綫区画の要素をもたないものを一括した。1～4は口縁部破片で、円形刺突を狭んで沈線が一周する。3は波状口縁を呈する。口頭部に廻る沈線で文様帶区画がなされる。胸部文様で明確なモチーフが把握できるものは出土していないが、沈線内に充填要素をもたないことや、スペード状文をもつもの（7）等、称名寺式との関連が考えられる一群である。器面は沈線施文以前にナデられている。

#### G類（第94図2）

平行沈線内に繩文が充填されるもの。出土は1点のみである。2は平行沈線で文様帶を区画し、区画内は上下の沈線を三角形のモチーフで連続して結ばれている。沈線は幅狭で浅い。沈線内には繩文Rが充填されている。胴下半は丁寧にナデられている。口唇内面に浅い沈線が廻らされ、口唇端部は直立する。推定口径24.8cm、現存高15.6cmを測る。

#### H類（第100図5～17）

器面にモチーフをもたないものを一括した。繩文の有無によって二分される。

#### H-1類（第100図5～9、13～15）

5～9、15は平縁で7、8は内面に稜をもち、口唇は鋭り気味である。6は口唇上がナデられ、平坦面をもつ。9は口唇が肥厚し、口唇上は丁寧にナデられ断面三角形の沈線が廻る。15は口唇上に突起をもち、片面に沈線をもつ。13は波状口縁を呈し、波頂部口唇内面は肥厚する。外面には円形の貼付をもち、内部は丸棒状工具で押圧が加えられている。何れも器面は丁寧にナデられている。

#### H-2類（第100図10～12）

繩文をもつものを一括した。10は口唇内面が浅く窪む。口唇は平坦にナデられている。地文は10がR L、11、12がL Rである。12は繩文施文後、器面がナデされている。

#### I類（第98図7～8、10、第100図16～17）

上記分類以外で器面の文様等の不明なものを一括した。第98図7は第94図1と同一個体の可能性

がある。口唇上の突起は「C」字状を呈し、突起を廻る沈線が口唇上の沈線と結ばれる。6は小波状口縁で「C」字状突起をもつ。10は口唇上に大きく膨り出した円形突起内面に円形刺突と中央部の孔に沿って沈線が引かれている。器面突起頂部に隆帯が貼付され両端は円形刺突が加えられている。内面に稜をもつ波状口縁である。第100図16は口縁が直立し端部は強く外反する。口縁部は幅狭で貼付文内は沈線で区画される。くびれ部に廻る隆帯上には押圧をもつ。7は綫とそれを結び杉綫状となる沈線文をもつ。

#### 第4群土器（第94図3、5～8、第101図1～22）

##### A類（第94図3、第101図1～11）

帶状捲文系の土器群である。第95図3は4単位の大波状口縁を呈するものと思われる。波頂部は台形状に開き刻目をもつ。波頂部、波頂間には綫位に粘土瘤が貼付され横位に刻目をもつ。波頂部を中心として梢円形に沈線文が描かれ、文様帯下部の粘土瘤にも刻目をもつ。口唇部には無文帯をもち、部分的に粘土瘤が貼付され、曲線的な沈線文がとりまく。地文はR Lの繩文が充填されている。

第102図1～3は第95図1と同様の器形を呈すると思われるが波頂部の形態が異なる。1は突起断面形は鋭角をなし、刻目が加えられている。2の波頂部は双頭状の突起をもつ。3は第95図3と同一個体の可能性をもつ。4は口唇が肥厚せず内面に稜をもつ。波頂下に2個の円形刺突をもつ。5はゆるい波状口縁をもつ。4、5とも帶状部は肥厚しない。6～11は平縁を呈する。6は口縁部に横刻みをもつ粘土瘤が貼付され、それを抉んで沈線で長方形に区画される。区画内部に2条の沈線が引かれる。7は口縁部の沈線が弧状を呈する。口唇上に突起をもつ。帶状部との比高差をもたない。9は粘土瘤上に刻目をもたない。11は口唇上に刻目が廻り、口唇直下に刻目をもつ粘土瘤が貼付されている。地文は全て繩文R Lである。

##### B類（第101図10）

口唇下が肥厚し、帶状部との比高差が顕著である。口唇上は丁寧にナデられている。帶状部には繩文R Lが施されている。

##### C類（第101図12）

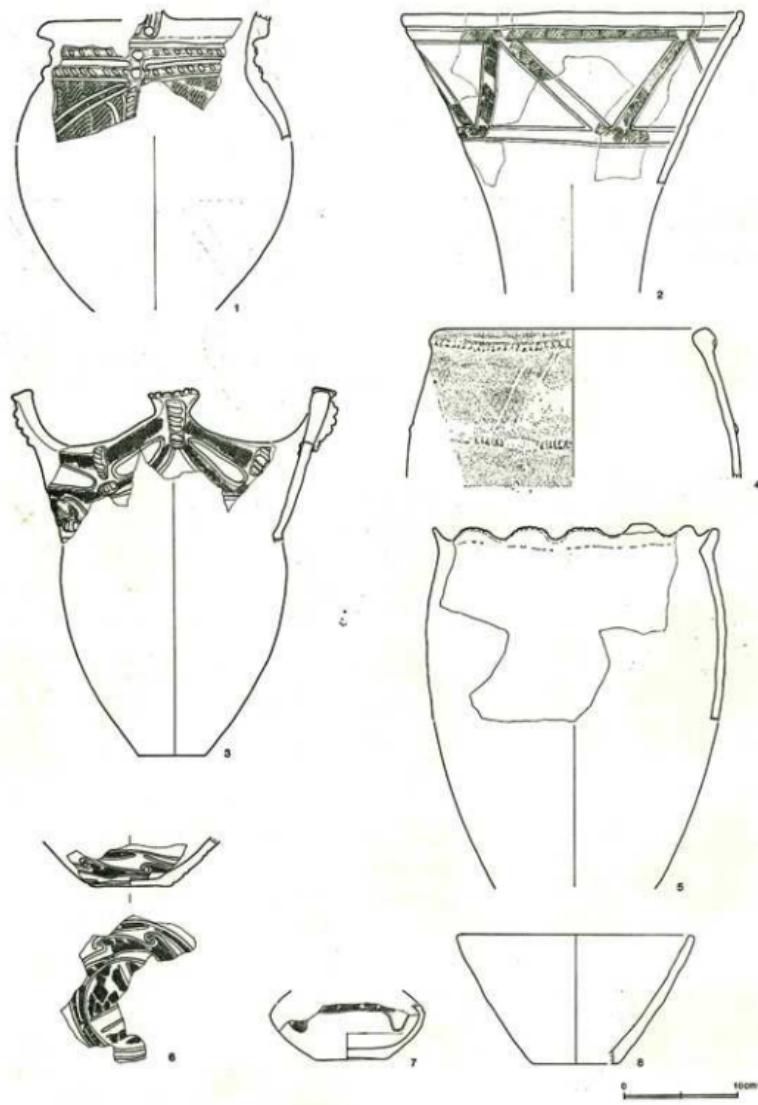
小波状口縁を呈すると思われる。口唇上及び帶状部には密に刻目をもつ。帶状部と器面との比高差は顕著である。口唇は平坦である。

##### D類（第94図6、7、第101図13、15）

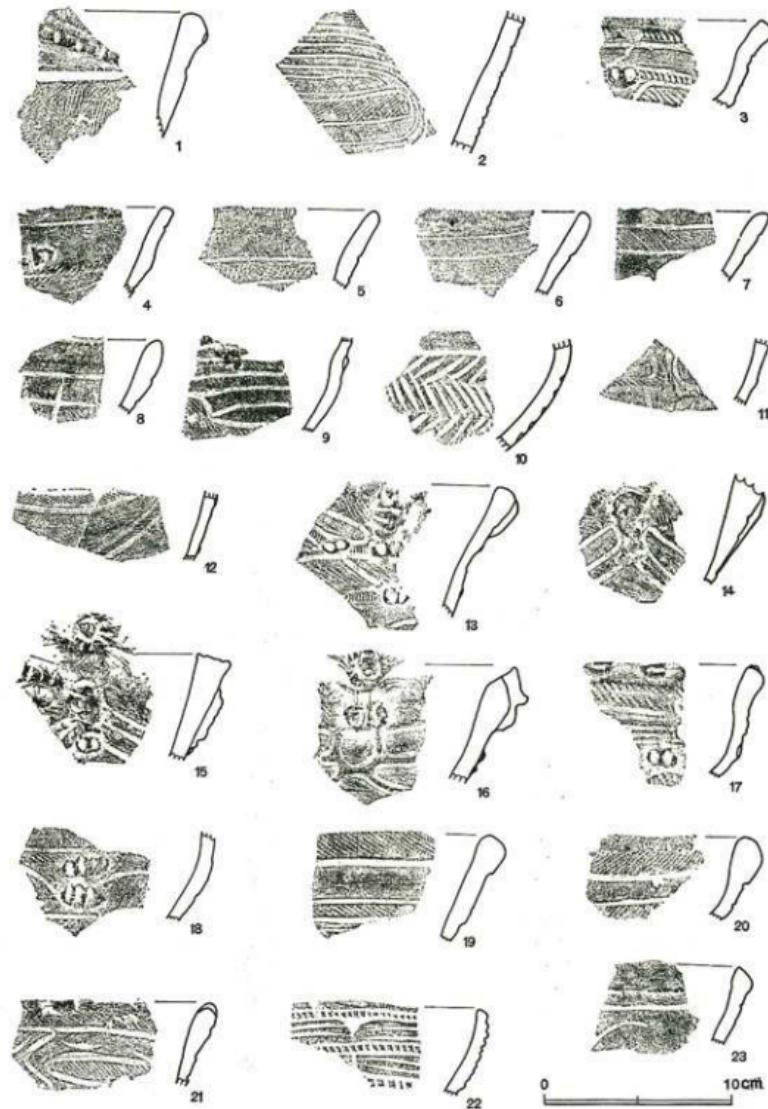
入組沈線文、三叉文等をもつ一群である。地文に繩文をもつ。第95図1は浅鉢形土器で、下半部の残存である。端部が渦巻き状となり連接する沈線文から成り、底部周囲に沈線が廻る。底部は「T」字形に平行沈線が描かれる。繩文R Lが文様空白部に充填されている。現存高4.2cm、径15.5cmを測る。2は器形が注口土器と思われる。文様は部分的で明確でない。沈線文内に繩文L Rが充填されている。現存高4.5cm、径12.6cmを測る。第102図13は注口土器である。注口部は欠失している。注口部に渦巻状沈線をもつ。15は直統的に開く口縁部破片で、口縁下に三叉文と曲線的な沈線文をもつ。地文は13、15とも繩文L Rである。

##### E類（第101図16、17）

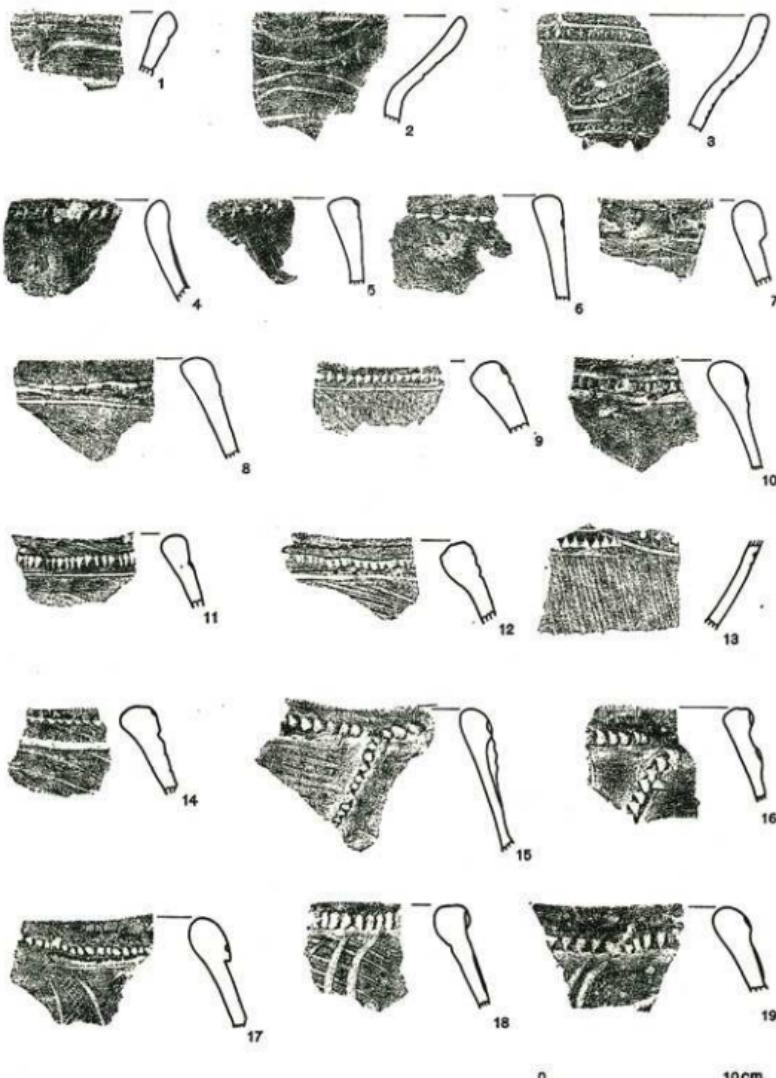
17は直統的に開く口縁部破片で、口唇に沿って沈線が廻る。沈線下に弧状の対向する沈線が描出



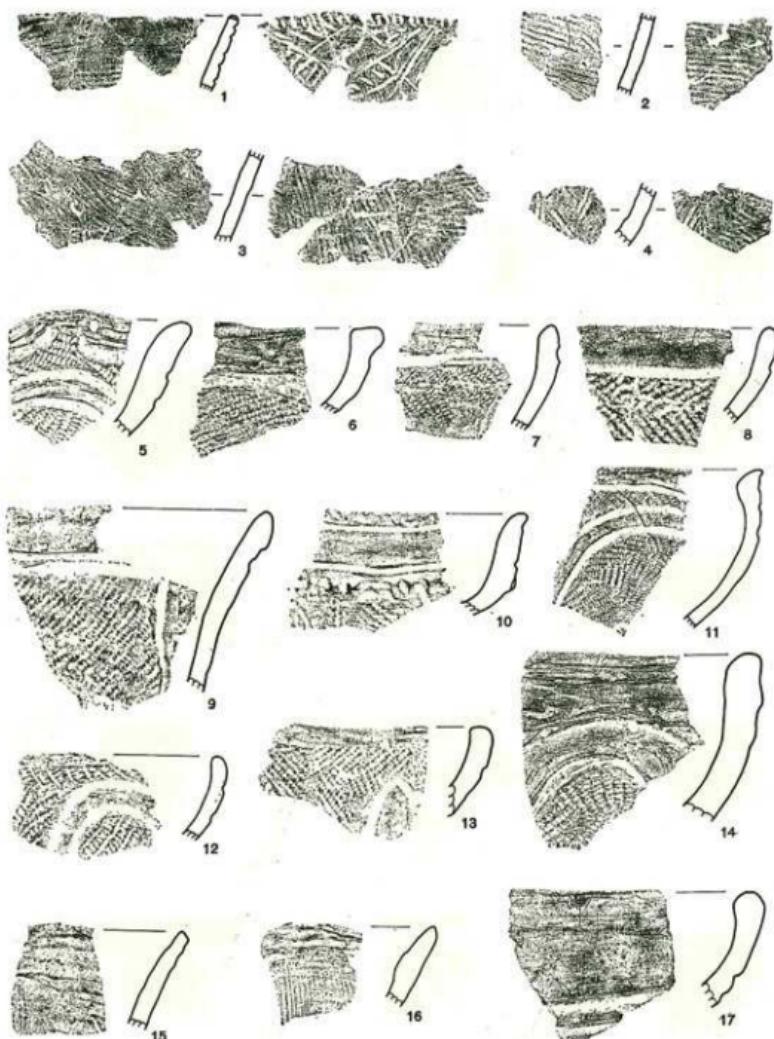
第93図 グリッド出土土器(1)



第94図 グリッド出土土器 (2)

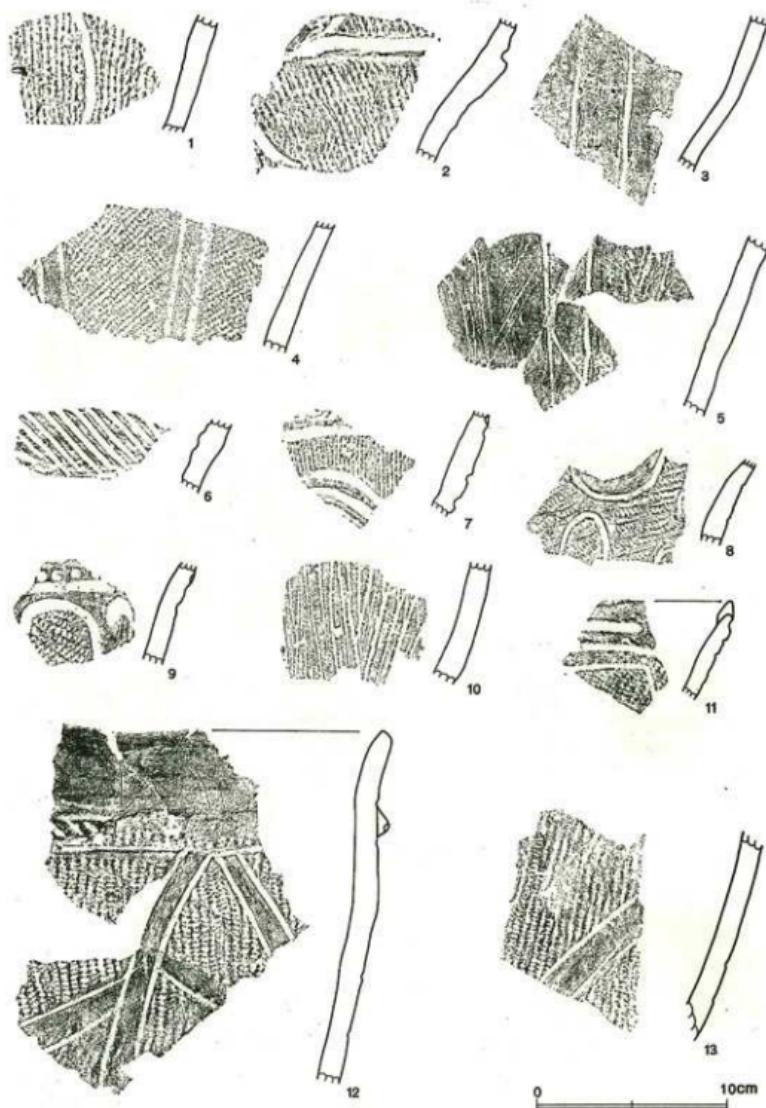


第95図 グリッド出土土器 (3)

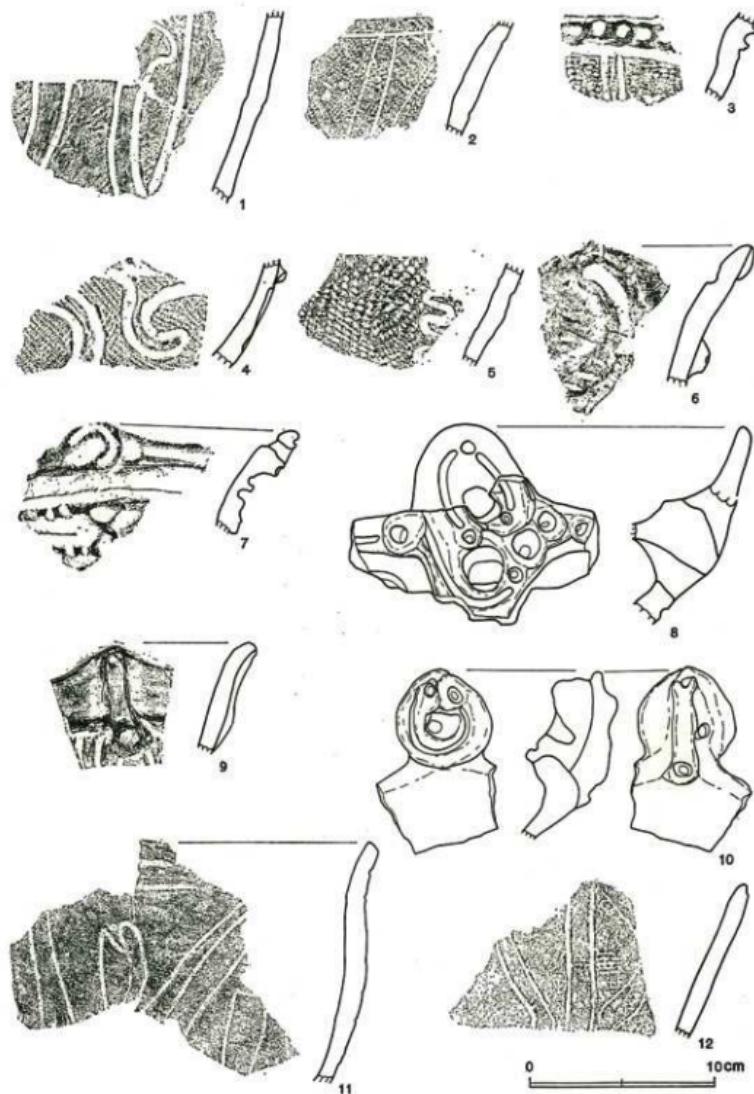


第96図 グリップ出土土器(4)

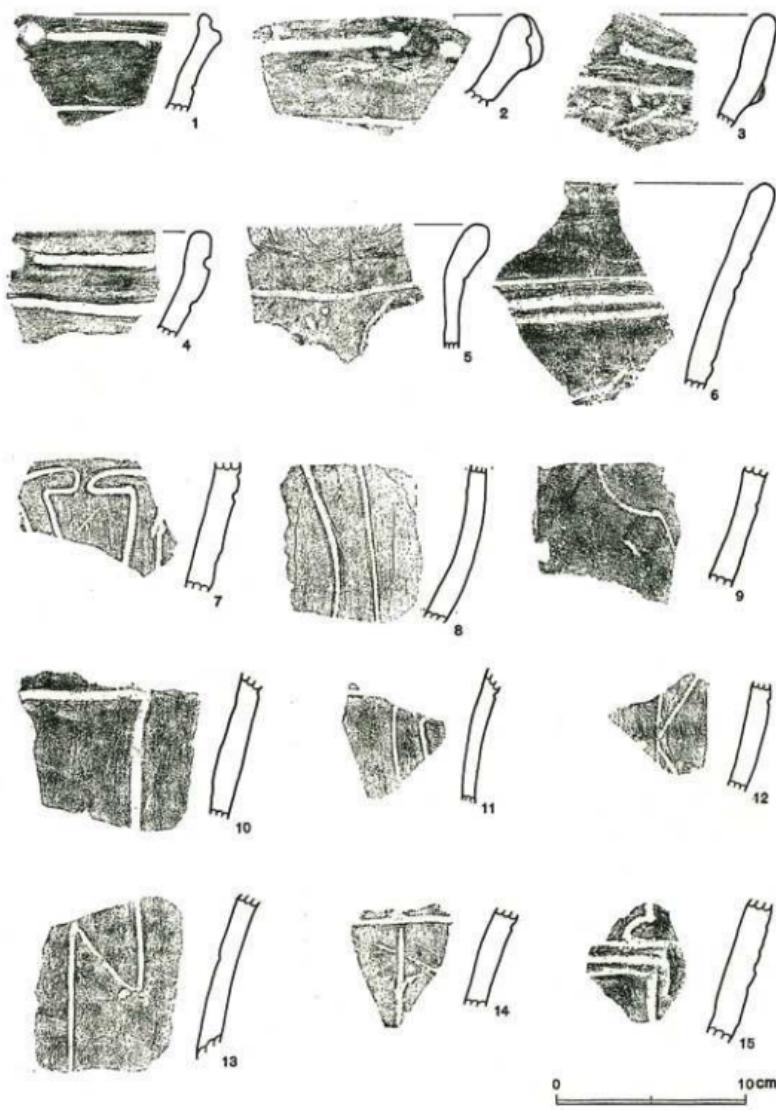
0 10 cm



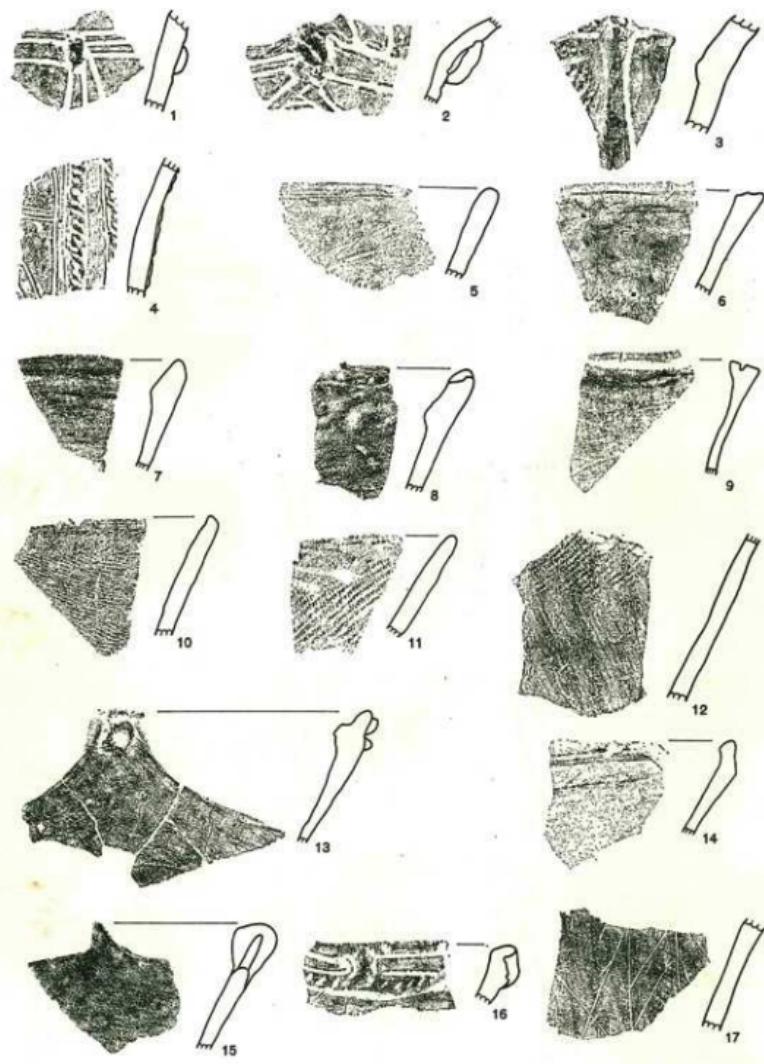
第97図 ガリド出土土器 (5)



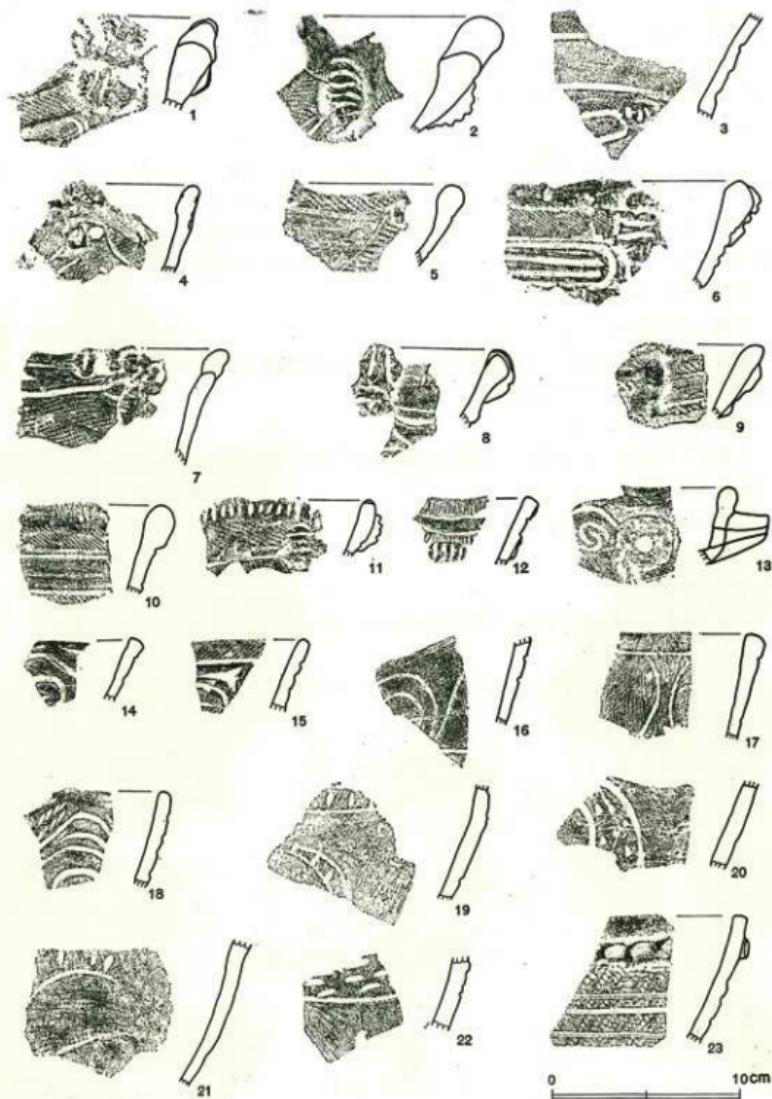
第98図 グリッド出土土器 (6)



第99図 グリッド出土土器(?)



第100図 グリッド出土土器(8)



第101図 グリッフ出土土器 (9)

され、細密沈線が充填されている。16は口縁部破片と思われるが、細い沈線が粗く引かれている。

F類（14、18～22）

曲線的な沈線文、沈線内に刺突をもつ一群である。18は波状口縁を呈し、口唇に沿って曲線的な沈線文が描出され、空白部に刺突をもつ。19～22は沈線内に刺突が充填される。

G類（第94図8）

無文の土器群である。口縁は山形状の波状口縁をなし、口唇上に刻みが加えられている。口頭部でくびれ、胴上部に最大径をもつ。器面は粗くナデされている。内面には成形時の凹凸が顕著に浅されている。推定口径26cm、胴部推定最大径27.3cm、現存高17.5cmを測る。8は浅鉢形土器で底部から直線的に開く。器面は丁寧にナデされている。口径21cm、推定器高11.6cmを測る。

第5群土器（第101図23、第102図）

A類（第101図23）

口唇に沿って断面カマボコ形の隆帯が貼付され、隆帯上には強く押圧が加えられる。地文はL Rの繩文で、地文上に平行沈線が廻らされる。

C類（第102図2、5）

内湾する口縁をもち、口唇上に三角形の連続した刻目をもつ。器面には斜位に粗い擦痕をもつ。

E類（第102図1、3）

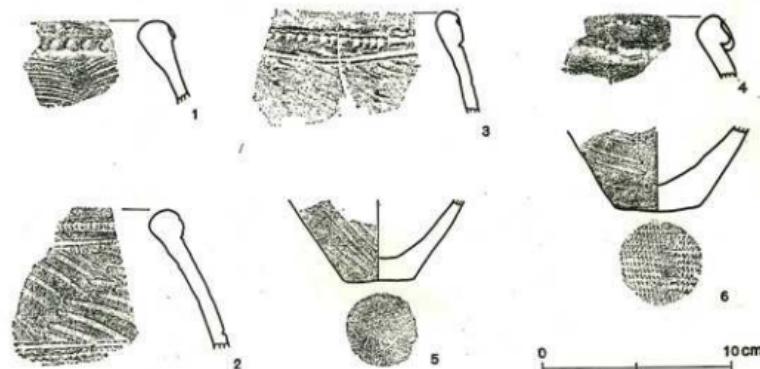
口唇上に連続押圧をもち、器面に平行沈線文をもつ。1、3はあるいは本群に含めるのは不適当かもしれない。

F類（第102図7）

無文で折返し口縁をもつもの。口唇は丸味をもつ。器面は粗くナデされている。

底部（第102図4、6）

底部を一括した。7は底径が比較的大きい。何れも網化底をもつが、7、8は不明瞭である。



第102図 グリッド出土土器（10）

## 5. グリッド出土石器 (第103~104図)

本遺跡から出土した石器は総数25点で、そのうち12点を図示した。先土器時代の石器2点が含まれる。調査区全体を通じて出土は極めて散漫であった。台地平坦部からはほとんど出土せず、多くは斜面部から低地部にかけて出土している。

### A類 尖頭器 (第103図 1)

B—I区C—16グリッドから出土した。第3層からの出土である。先端部が欠損しているが、全長は5cm前後と思われる。形態は不葉形を呈し、台面三角形をなす。縁辺部に比較的粗い交互刺離が施され、更に細かな調整刺離が加えられている。離面は刺離面が浅されている。形態から野川第4層1に対比されよう。1点のみ出土した。

### B類 ナイフ形石器 (第103図 2)

C—I区B—20グリッド第3層から出土した。片縁が欠損している。表面に棱をもつ薄い横長剝片の縁辺部に細かな調整刺離が加えられている。

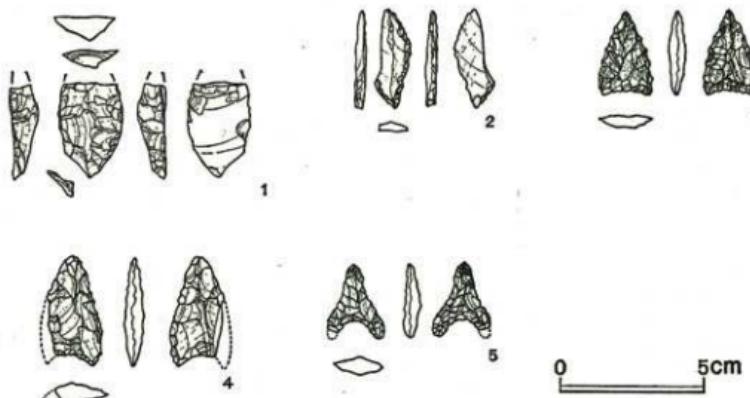
### C類 石鎌 (第103図 3~5)

3点出土している。何れも無茎で3、4は基部に浅い抉入をもつ。3は長脚をなす。1は刺離が細かく丁寧なつくりである。2は縁辺部に粗い調整刺離が加えられ、基部には片面のみに観察される。3は両側縁にゆるい瘤みをもつ。

### D類 打製石斧 (第104図 1~4)

打製石斧は総数10点出土し、そのうち4点を図示した。

第104図1は短冊形を呈する。刃部は欠損している。表面には自然面を大きく浅し、断面形は緩



第103図 グリッド出土石器 (1) 石鎌

いカーブを描いている。剥離は粗く、裏面には第1次剥離面が浅されている。ほぼ中央部両側縁に敲打痕が観察される。

2は撥形を呈し、刃部は大きく拡がる。表面に自然面を浅し、離面は粗い剥離が加えられている。調整剥離は片縁に集中する。刃部は欠損している。磨耗度は観察されない。

3、4は中央部に抉入をもつ。3は片縁、4は両側縁に抉入が加えられている。3は表面に自然面を多く浅す。離面の剥離は粗く、調整剥離も部分的に施されている。4は自然面をもたない。抉入は片縁に顕著である。共に内厚で、4は刃部は両側からの剥離によって作出されている。剥離は粗く、両側縁に敲打痕をもつ。

#### E類 磨石(第103図5)

偏平な河原石をそのまま開いている。縁辺部に面取り状に磨耗が観察される。横断面は長楕円形を呈する。平坦部の磨耗は顕著ではない。

#### F類 石剣(第103図6)

6は粗い剥離後、全体を敲打して作出したものと思われる。把手部は剥落しているが径6cm程度と思われる。柄の部分は径2.4cmを測る。敲打痕は把手平坦面、及びつけ根部分に浅されている。敲打後に研磨は加えられない。

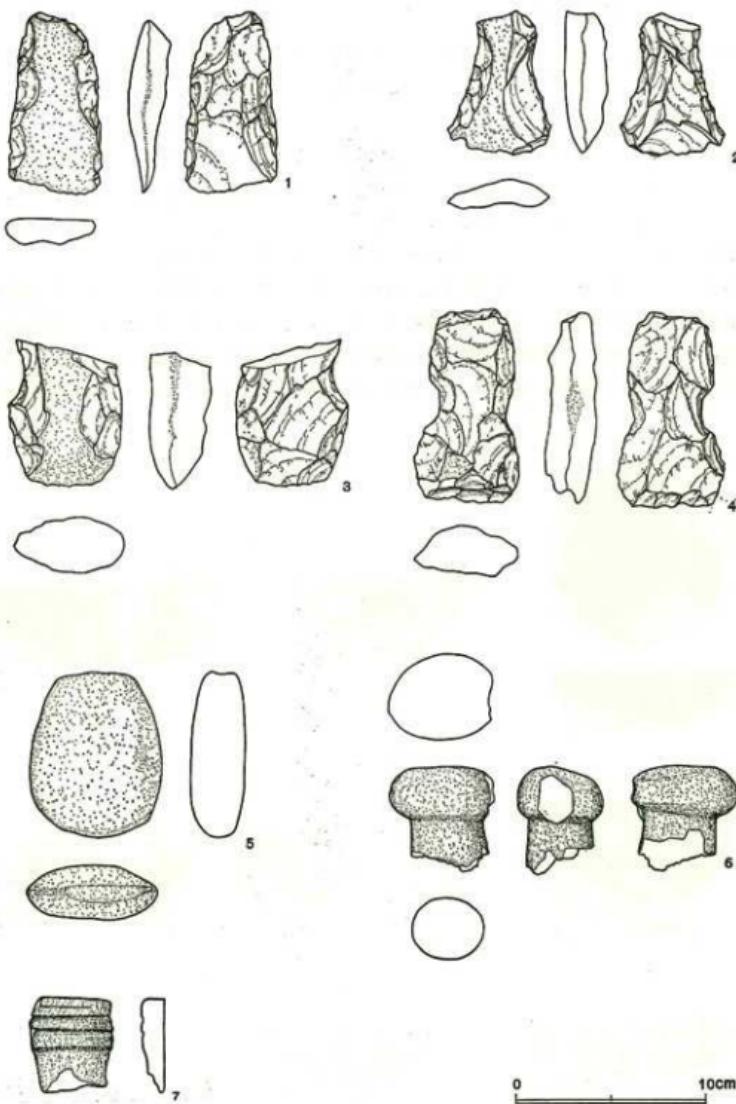
#### G類 石棒(第103図7)

7は大部分が敲打しているが、偏平であったと思われる。把手部には浅い条続と2条の深い条続が施され、端部は磨かれているものと思われる。基部との境に緩い段をもつ。全体に粗い研磨が加えられている。

第2表 石器一覧表

図版番号	分類	出土地点	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 材	備 考
第102図1	A		3.4	2.3	0.9	5.4	黒曜石	先土器
	B		3.5	1.1	0.4	1.1	黒曜石	先土器
	C		3.0	1.8	0.6	2.2	チャート	
	C		3.9	1.8	0.7	3.6	チャート	
	C		2.7	2.0	0.6	0.9	黒曜石	
第103図1	D		9.3	4.9	2.1	87.1	砂岩	
	D		7.2	5.7	2.3	86.9	粘板岩	
	D		7.8	6.0	3.0	90.9	砂岩	
	D		10.2	5.9	2.4	91.3	砂岩	
	E		9.0	7.0	2.8	97.9	砂岩	
	F		5.9	5.4	3.9	90.5	砂岩	
	G		5.1	4.3	0.9	43.8	結晶片岩	

註・尖頭器-A ナイフ形石器-B 石鎌-C 打製石斧-D 磨石-E 石剣-F 石棒-G



第104図 グリッド出土石器（2）

## 6. 中近世の遺物

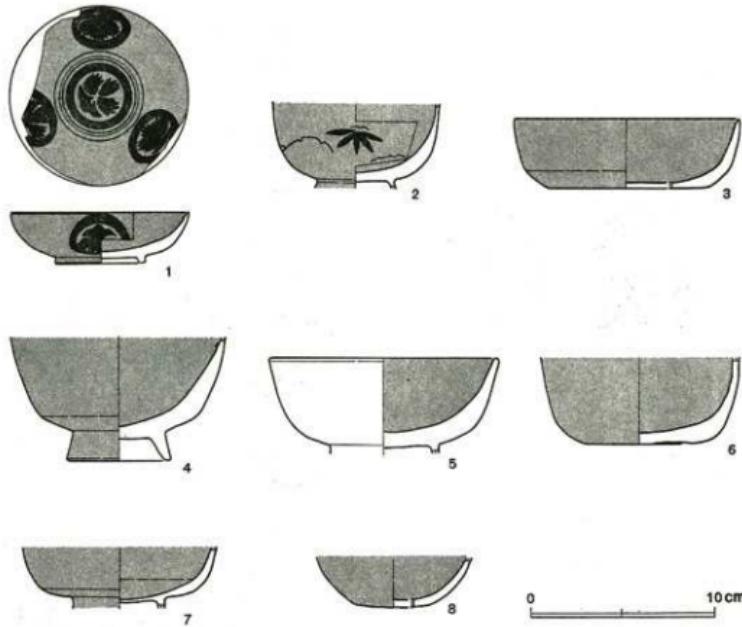
中～近世の遺物はグリッド内から陶磁器を中心として多くの破片が出土したが細片が多く、器形、文様等を把握し得る資料を図示するに留めた。漆器は低地部にあたるC区から出土している。

### 1 漆器（第105図）

図示した資料は全て椀である。1は内外面に赤漆が塗られ、その上に銀灰色の漆で器面に3単位と高台内側に「家紋」がスタンプ押しされている。口径9.8cm、底径5.0cm、器高3.3cmを測る。

2は1同様、内外面に朱漆が塗られ、外面には銀灰色の漆で帯状の文様が描かれている。口縁、高台部が欠損している。現存径は口径9.2cm、底径4.5cm、器高4.6cmを測る。

3～8は文様を持たず、木地に漆が塗られただけの椀である。3は底部が欠損しているが高台はもたないものと思われる。内外面共に朱漆が塗られている。口径12.4cm、底径8.7cm、器高3.8cmを測る。4は高台が高く、器面は底部と胴部の境に稜をもつ。内外面共に朱漆が塗られている。口縁のみ欠損、現存口径11.8cm、底径5.6cm、器高6.7cm、高台部高1.6cmを測る。5は内面朱漆、外面



第105図 漆 器

に黒漆が塗られている。高台部を欠損している。口径12.7cm、現存底径6.0cm、現存高5.2cmを測る。6は高台を持たない。口縁は欠損している。内外面とも黒漆が塗られ、漆は部分的に剥落している。現存口径10.9cm、底径6.0cm、現存高4.7cmを測る。7は口縁、高台部共に欠損している。器面に継い稜をもつ。内外面共に朱漆塗りである。口径、器高、底径は現存部で10.6cm、3.3cm、5.0cmを測る。8は小型碗で高台をもたない。内外面共に朱漆塗りである。現存部で器高2.7cm、底径4.4cmを測る。

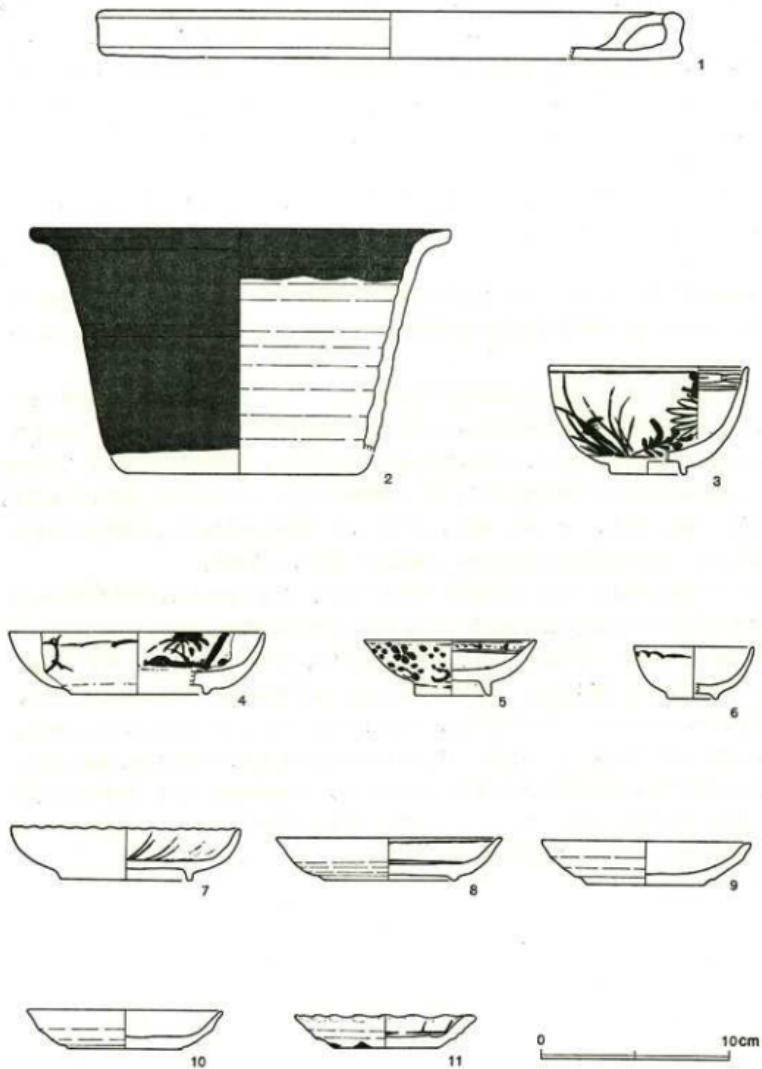
## 2 陶磁器（第106図）

1は焰熔である。赤味がかった肌色を呈し、きめ細かな土で焼かれている。内耳をもち、器内外面から底部周辺にかけて横ナデされている。口唇がやや肥厚する。口径、器高は共に推定で、31.4cm、2.4cmを測る。

2は植木鉢であろう。瓦質で内面には成形時の凹凸が顕著に残る。口唇は強く外反し、器面中位に浅い凹続が廻る。外面及び内面胴上部に黒漆が塗られている。推定口径22.5cm、現存高12.2cmを測る。

3～7は磁器である。3は染付丸碗で草花文が描かれ、コバルト発色が濃い。瀬戸、美濃産と思われる。口径10.8cm、器高5.7cmを測る。4は染付邊で内面に竹林、外面に葛状の文様が描かれている。瀬戸、美濃産と思われる。口径13.7cm、器高3.4cmを測る。5は染付の蓋と思われる。小ぶりで口縁は端部で若干くびれ気味に開く。瀬戸、美濃産と思われる。口径9.3cm、器高3.0cmを測る。6は染付の猪口である。口径6.5cm、器高2.9cmを測る。7は淡緑色の釉をもち、口唇が小波状となる皿である。内面に暗文状の文様をもつ。口径12.3cm、器高2.7cmを測る。

8～11は陶器である。8は直統的に開き口唇が若干外反気味になる皿である。器面には整形時の弱い稜が浅かれている。低い削り高台を有する。内面には鉄釉による同心円文が描かれている。口径12.3cm、器高2.8cm、底径6.8cmを測る。瀬戸、美濃産と思われる。9は器面に粗い横ナデが加えられ、弱い稜をもって開く皿で、口唇が外反気味である。底部周辺に浅い削りが加えられている。口径11.4cm、器高2.4cm、底径6.4cmを測る。志野産と思われる。10は灰釉皿である。中位に稜をもち、口唇下が若干窪みをもって外反している。内面底部に起伏をもつ。口径16.5cm、器高2.1cm、底径6.0cmを測る。11は肉厚で口唇が指頭のつまみによって小波状を呈している。鉄釉のかけられた小皿で、内面は釉がかきとられており、浅い窪みが廻らされている。口径6.9cm、器高1.8cm、底径5.4cmを測る。9～11は底部は全てナデかれている。



第106図 グリッド出土熔炉、陶磁器

## VII 結語

原遺跡は勝坂式末期から加曾利EⅢ式期にかけて営まれた集落で、14軒の住居跡からは、器形復元し得る40個体余の土器が出土している。当遺跡の調査によって得られた遺物を基に、土器群の段階的位置づけ、および住居跡の同時性について若干の考察を加えておきたい。

### 1 土器群の変遷

土器群の分類については、炉体土器に覆土内出土土器を加味して検討を加え、遺跡内における段階的序列を求めようとしたものである。その結果、勝坂式が2期に、加曾利E式は3期に区分された。各期の内容について以下で説明する。

#### 第Ⅰ期

第3号住居跡出土土器群を第Ⅰ期に位置づけた。第1、5号住居跡に先行する段階である。

第106図1、2はキャリバー形の深鉢形土器で、口頸部横円横帯区画文、口縁部文様帶の土器群である。同図4は胴中位で張る深鉢形土器で、縦位横帯区画文系の土器群であろう。同図5は阿玉台式土器で4単位の波状口縁をもつ。隆帯に沿って幅広の爪形文が施されている。

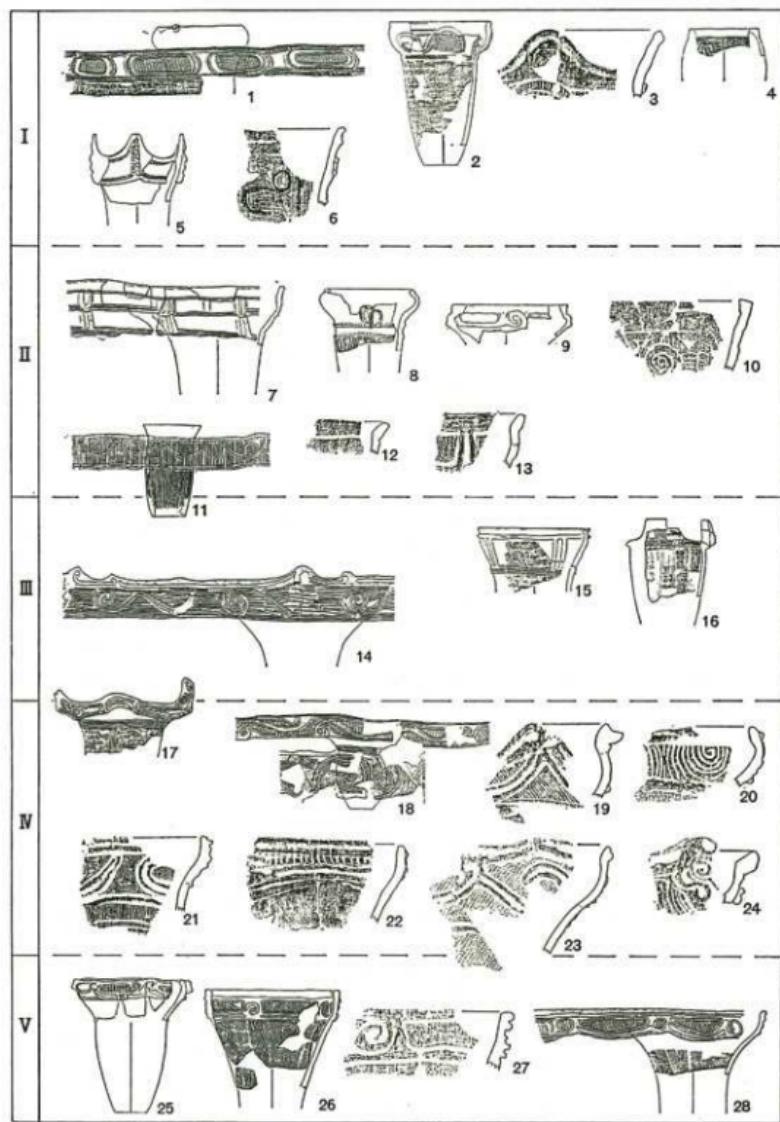
第3号住居跡に近似した土器群を出土する遺跡には、松ノ木遺跡30号住居跡（佐々木 1980）、貫井遺跡2号住居跡（秋山 1978）などが掲げられ、遺跡数も多い。阿玉台式土器の伴出例は武藏野台地上の遺跡でも少数ながら報告されている。貫井遺跡2号住居跡、恋ヶ窪遺跡（秋山 1980）などがあり、3単位構成をとる点は本遺跡と異なるほか、沈線施文例もある。第3号住居跡出土土器群は、武藏野台地縁辺部の松ノ木遺跡例を介在させても、三角横帯文系統の土器群が欠けていたり、全体に土器様相は貧弱である。先行する西原遺跡9号土壙（宮崎他 1972）、下加遺跡5号住居跡（柳田他 1972）とは土器組成で大きく異なる。多摩ニュータウンNo.46遺跡（可見他 1968）は古手の様相を浅す土器群が出土しているが、本段階と近い土器様相をもつなど、時間差とともに、地域性を考慮する必要があろう。

#### 第Ⅱ期

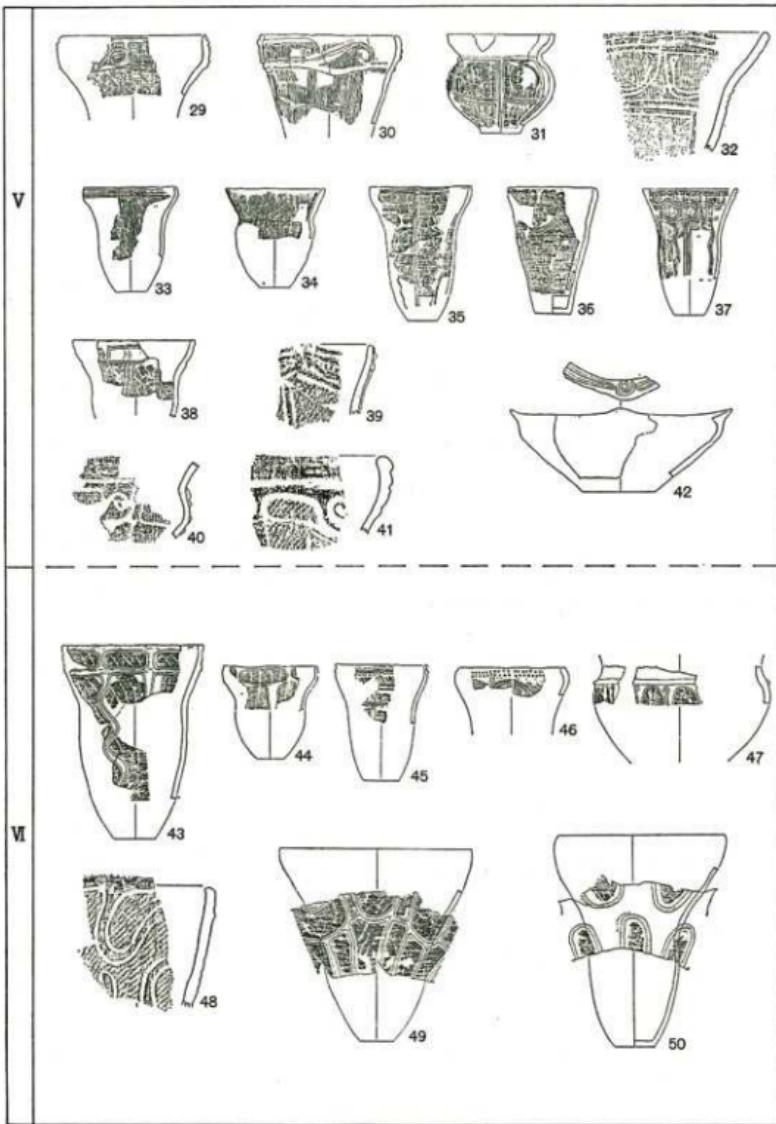
第1、5号住居跡出土土器群が本段階に位置づけられる。第5号住居跡は炉体土器以外に良好な資料が出土していない。

第Ⅰ期と土器組成に共通性が強く認められ、土器自体の内的変化を表示しているものと考えられる。区画内充填手法の簡略化、半載竹管内面を用いた半隆起続による区画文の多用、隆帯文から沈線文への変化、それらを総合した区画分割の簡略化などの様相が認められる。同図7はキャリバー形の口縁部が2段に分割されている。垂下する隆帯、隆帯間の沈線の形状には、櫛形文土器の口縁部に共通性が伺える。大宮台地、武藏野台地縁辺部にある諸遺跡で櫛形文土器の出土する遺跡は少なく、本来的な同図8、11の様な土器群が主体を占め、櫛形文土器は武藏野台地西縁部、多摩地域に多出する傾向があるようである。

同図11は、7、8等のキャリバー形土器と共に、勝坂式終末に主体となる土器である。区画に隆帯を多用するものとともに、沈線で区画を描出す土器群も存在している。肩山遺跡8号住居跡



第107圖 原遺跡出土土器變遷圖



第108図 原遺跡出土土器変遷図

(佐伯他 1980)、木曾呂表遺跡 2 号住居跡（並木 1980）、中郷遺跡 2 号住居跡（青木他 1982）などがあり、下総台地では子和清水貝塚 240 号住居跡（関根他 1978）が代表例となろう。中郷遺跡例は沈線主体で 9 に近い。土器群總体では、野塙前原遺跡住居跡第Ⅲ層から第Ⅱ層にかけての段階（内田 1982）に位置づけが可能であろう。9 は覆土上層からの出土で、あるいは時期的に下降することも想定される。

#### 第Ⅲ期

第 4 号住居跡出土土器を位置づけた。加曾利 E I 式土器群は、頸部無文帶の有無による細分に否定的見解が呈示され（笠森 1977）、必ずしも細分のメルクマールになり得ないことが明らかにされている。

本遺跡で加曾利 E I 式に相定される第 4、8 号住居跡を検討しても、E I 古式に位置づけられる土器群は検出されていない。第 4 号住居跡覆土内の遺物は勝坂式が主体を占め、炉体土器である 14 から位置づけを行った。土器群の構成には不明な点が多い。14 の口縁部モチーフにみられる隆帯は断面が丸味を帯びており、隆帯が偏平化していくことを考えると、第 6 号住居跡覆土内の土器群より古手の様相を示していると思われる。

#### 第Ⅳ期

加曾利 E I 式の最も新しい段階と思われる。第 8 号住居跡出土土器を本段階に位置づけた。同図 17 は炉体土器で、花積貝塚 2 A 号住居跡（栗原 1970）出土土器と器形、文様帶、文様構成が酷似している。同様の土器は新曲輪遺跡、子和清水貝塚 243 号住居跡で出土している。8 号住居跡出土土器を一括としてとらえるならば、17 の系譜の土器は E I 式末まで浅ることが考えられる。しかし基準とした花積貝塚、子和清水貝塚例は、8 号住よりも全体に古手の土器群が主体となっている。

18 は「の」字文の端部が文様帶区画に接しており、文様帶が狭小化する過程を示すものである。胴部に展開されるモチーフは西原遺跡 9 号住居跡に近似している。同様のモチーフは重弧文系土器の胴部文様に多用されている。二宮遺跡 1 号住居跡（橋口 1978）、中山谷遺跡 4 号住居跡（新藤 1975）、新座遺跡 5 号住居跡（坂詰 1975）などで重弧文土器の出土がある。他の土器群は、頸部無文帶を幅広く浅なものや無文帶の消失傾向を示す土器群などもあり、ほぼ本段階と近接した時間内での所産と思われる。22 は口縁部様帶の縮少傾向を示し、キャリバー形土器の文様帶変遷のパラエティーの一つを示すものと思われ、満巻文、長方形区画文主体のモチーフ、「の」字文のモチーフの変化の方向性を示すものであろう。

#### 第Ⅴ期

第 6、9 号住居跡出土土器群から成る。頸部無文帶の消失、口縁部文様帶の縮少、「の」字文モチーフの衰退、長方形区画文、満巻文モチーフの凌駕傾向などが認められる。連弧文土器や、その影響下に生じた土器群が加わるなど、土器群に変化が著しい。25 は口縁部文様帶の縮少傾向を明瞭に示しており、系統的には、増善寺遺跡グリッド出土土器（宮崎他 1982）の一部を介在させて 28 に至る変化過程が考えられよう。満巻文、長方形区画文を併せもつ 26、27 は、満巻文が独立したり、長方形区画文の一部を取り込まれている。口縁部文様帶下段の隆帯上に施される沈線は概に部分的である。28、29 も同様に沈線が消失してゆく傾向を示し、近接した所産を想起させよう。28 は口縁

部下段の区画が消失した一列であり、端部の渦巻文は独立した文様要素となっている。頸部に無文帶の意識を強く残しており、撚糸地文を用いている点は、連弧文土器の影響を踏まえていると考えるべきであろう。

第Ⅷ期に先行する連弧文土器は島之上遺跡1号住居跡（笠森 1977）出土土器が好例となる。撚糸地文上に端部が渦巻く連弧文と、交互刺突文からなる区画をもつ。大山遺跡A 6号住居跡（谷井 1979）は島之上例より若干下ると思われる。本遺跡13B号住居跡は大山遺跡A 6住よりも全体に新しく、連弧文土器は32、37のように沈線の単位数が不規則であったり、区画の消失したものや連弧文土器の影響下に生じたものも多くみられ、大山遺跡3号住居跡（金子 1982）に近接した時期及びそれ以降の土器群が含まれる。

#### 第Ⅷ期

加曾利E Ⅲ式土器を一括した。第10、11、14号住居跡出土土器が該当する。幅広の磨消懸垂文、梢円区画文、49の様な渦巻文をもつ。懸垂文は口縁部文様に接しており、43、44の如く、施文上のバリエーションをもつ。49は梶山遺跡（1970）出土例に酷似し、久保山遺跡6号住居跡（大塚 1983）など分布は広い。胴部文様帯の2段分割は共通した手法であるが、久保山遺跡例のように口縁部文様帯を浅し、胴部に展開されるものもある。

縄文施文も充填手法が顕著となる。渦巻文系統の土器群は単独埋甕として利用される例が多いようである。Ⅷ期は各住居跡の遺物も量的に恵まれず、細分することはできなかった。

以上、大まかであるが、原遺跡出土土器群の段階的変遷を追ってきた。遺構内出土土器群には量的、系統的な偏りが大きく、系統的な変遷を追うことはできなかった。

筆者等はかつて縄文中期土器群の再編を試みたが、その細分、編年案に準拠すれば、第Ⅰ期—戸戸戸I（第Ⅷ期）、第Ⅱ期—戸戸戸II（第Ⅸ期）、第Ⅲ期—加曾利E I中（第K b期）、第Ⅳ期—加曾利E I新（第X期）、第Ⅴ期—加曾利E II中～新（第X a～X b期）、第Ⅵ期—加曾利E III（第Y期）に対応することとなる。

#### 2 住居跡の変遷について

前項で土器群の段階区分を行った。基本的に住居跡出土土器を一括とみなしたものであり、住居跡の構築時期とその存続期間と実際上の土器群とは微妙に時間差をもっていると思われる。調査範囲が限定されてはいるものの、縄文時代中期中様から後半期にかけての住居跡が比較的まとまっており、同時性の問題も大まかながら追うことが可能かと思われる。

検出された14軒の住居跡のうち、炉体土器からの時期決定が可能なものは第1、3、4、5、6、8、13 b、14号住居跡で、他はプランが不明瞭であったり、覆土内出土土器のみで時期決定し難かったものである。

各住居跡の平面形態は、勝坂式が円形ないしは梢円形で、第5号住居跡を除き4本柱穴で中央部から離れて炉跡をもつ。加曾利E I式では方形ないしは長方形を呈する。E II式以降では長方形ないしは梢円形を呈し、平面形態でも大形化してくるようである。

各住居跡から得られた資料を基に住居跡の変遷をたどるならば、第1→3、5号住居跡、第4→6号住居跡、第9、13B→6号住居跡と考えられる。他の住居跡については出土遺物が貧弱で対象

外とした。加曾利EⅢ期では第11号住がやや古く第10、13号住は時期的に近接していると思われる。第3、5号、第9、13B号佐居跡も各々微妙な時間差をもつものと思われるが、第9号住は第13B号に若干後出する位置づけを与えておきたい。尚上屋構造、廃棄論等は本項では触れ得なかった。後日稿を改め検討を加えたい。

#### 引用参考文献

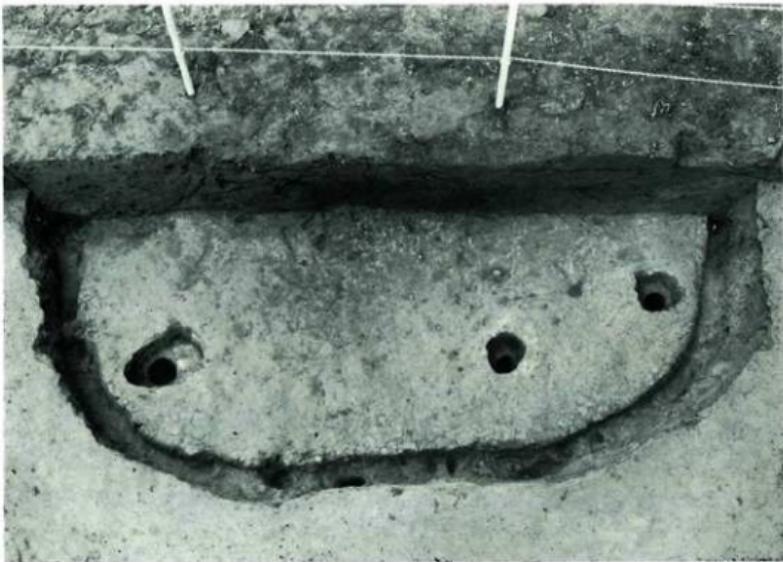
- 秋山道生他 1978 「貫井」 小金井市文化財調査報告書4  
秋山道生他 1979 「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅰ」 国分寺市教育委員会  
秋山道生他 1980 「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅱ」 国分寺市教育委員会  
安孫子昭二他 1974 「貫井南」 小金井市貫井南遺跡調査会  
安孫子昭二 1978 「文京区道坂遺跡」 動坂遺跡調査会  
青木美代子他 1982 「中郷」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第13集  
青木秀雄他 1979 「風早遺跡」 庄和町風早遺跡調査会  
石井 寛 1977 「縄文時代における集団移動と地域組織」『港北ニュータウン調査研究集録』2  
内田祐治他 「野塙前原」 清瀬市教育委員会  
岩井住男他 1970 「勝沼」『風景』7  
可見通広他 1969 「Na46遺跡」『多磨ニュータウン遺跡調査報告Ⅶ』  
金子直行他 1982 「大山」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第17集』  
神奈川県立博物館 1970 「横山」『神奈川県立博物館集報1』  
神奈川考古同人会 1978 「神奈川県における縄文時代中期後半土器編年試案」『神奈川考古』10  
金子智江 1978 「秩父山遺跡」 上尾市教育委員会  
佐々木幹夫他 1980 「松ノ木遺跡第2地点発掘調査報告書」 富士見市教育委員会  
笠森健一 1976 「志久遺跡」 埼玉県遺跡調査会報告第31集  
笠森健一他 1977 「前畑、島之上、出口、芝山」 埼玉県遺跡発掘調査報告第12集  
佐伯弘晃他 1980 「扇山遺跡」 扇山遺跡調査団  
関根孝夫他 1978 「子と清水貝塚」 松戸市教育委員会  
白石浩之 1978 「加曾利E式土器の変遷」『考古学研究』25-1  
新藤康夫 1976 「加曾利E式土器細分の再検討」『考古学雑誌』62-3  
新藤康夫他 1975 「中山谷」 小金井市文化財調査報告書  
谷井 彰他 1979 「大山」 埼玉県遺跡発掘調査報告第23集  
谷井 彰 1978 「加曾利E式土器の覺書」 埼玉県立博物館紀要5  
谷井 彰、宮崎朝雄、大塚寿司、鈴木秀雄、青木美代子、金子直行、細田 勝 1982 「縄文中期土器群の再編」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要  
下村克彦 1970 「花積貝塚発掘調査報告書」 埼玉県遺跡調査会報告第15集  
並木 隆 1980 「木曾呂呂表遺跡」 川口市教育委員会  
能登 健 1975 「縄文文化解明における地域研究のあり方—関東地方加曾利E式土器を中心として—」  
『信濃』27-4

# 図 版



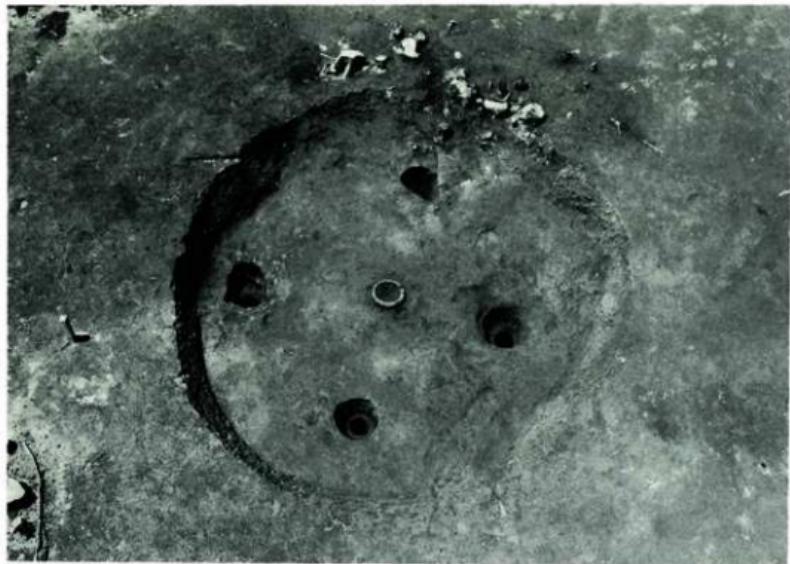


第1号住居跡

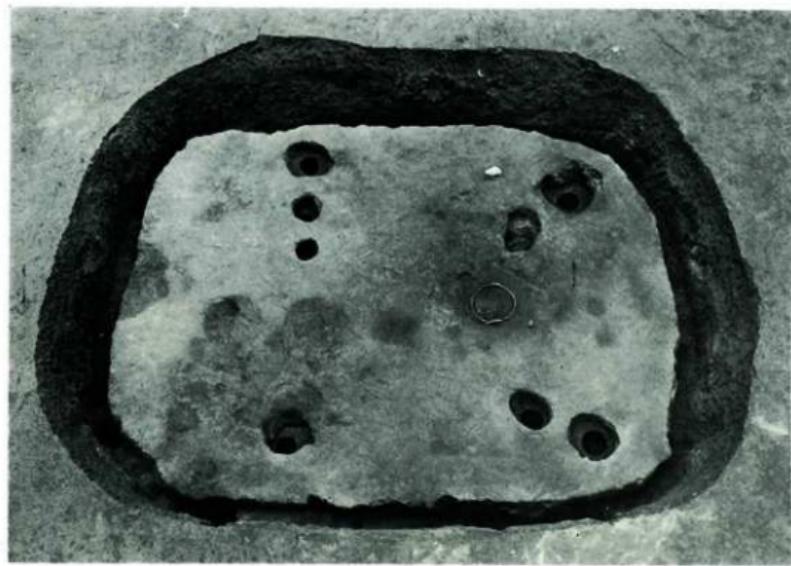


第2号住居跡

图版 2



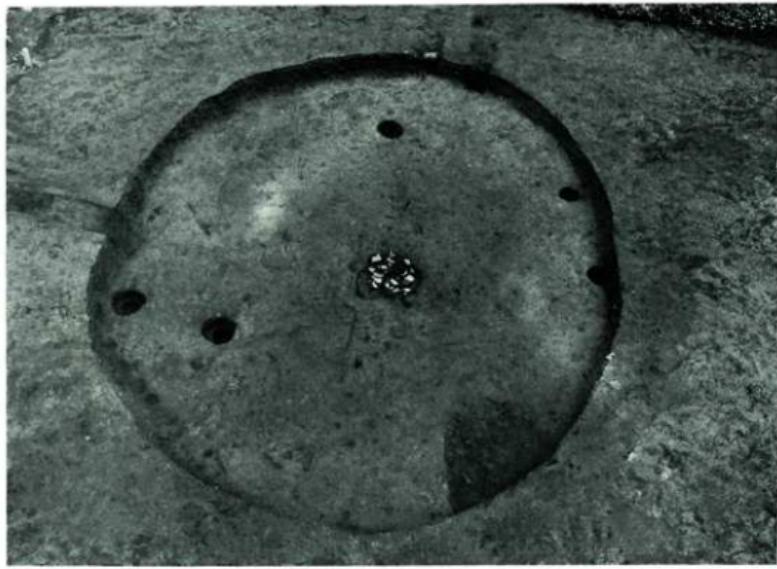
第3号住居跡



第4号住居跡

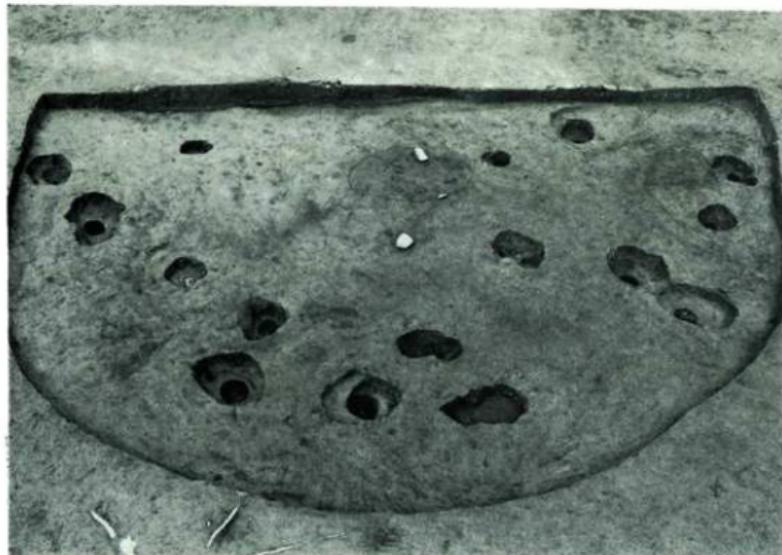


第5号住居跡

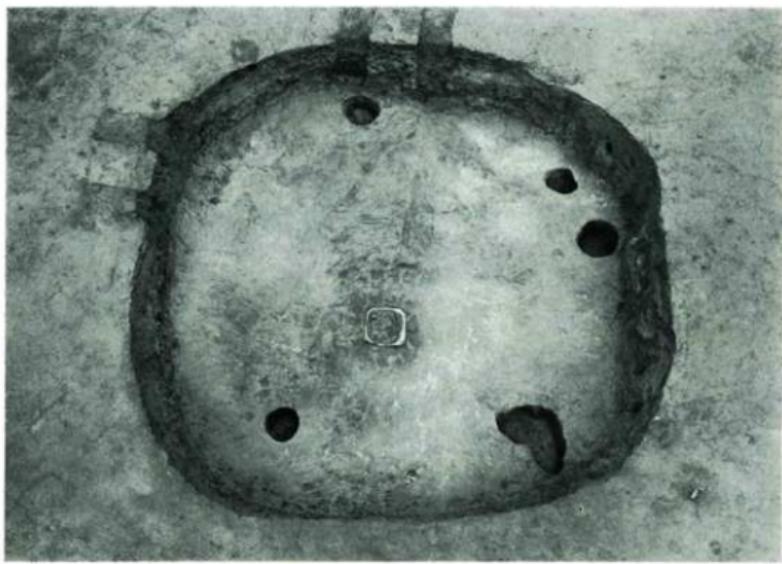


第6号住居跡

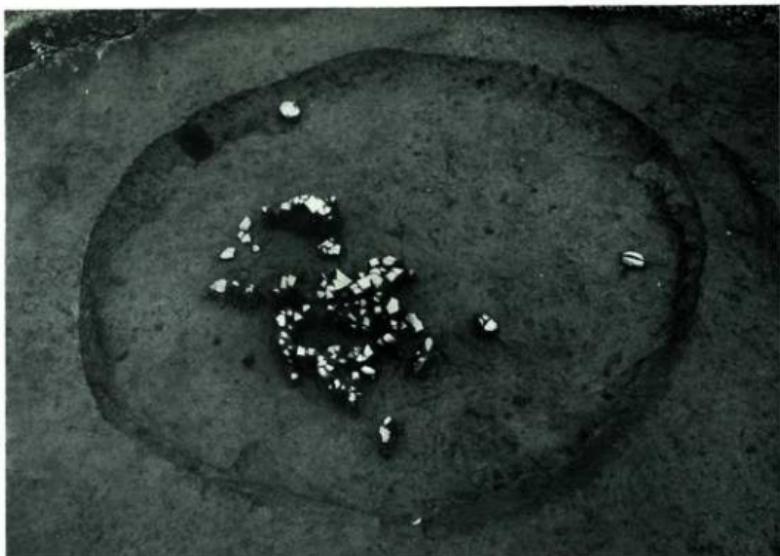
图版 4



第 7 号住居跡



第 8 号住居跡

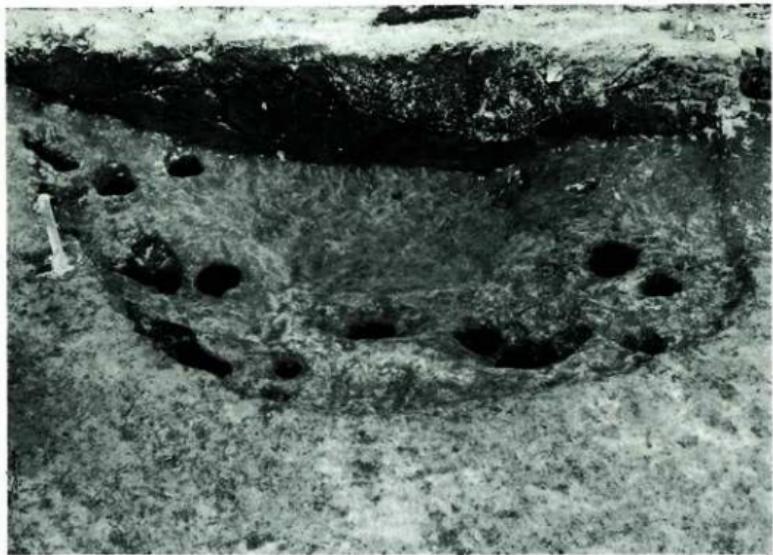


第9号住居跡



第11号住居跡

図版 6



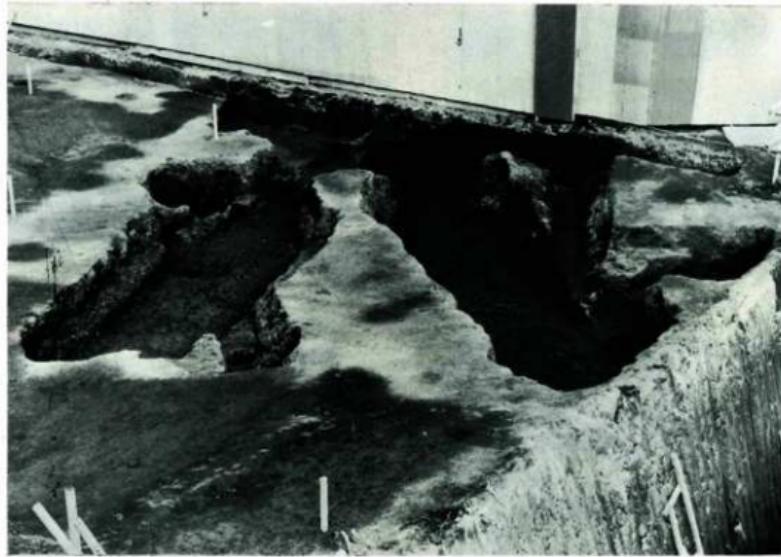
第12号住居跡



第13号住居跡

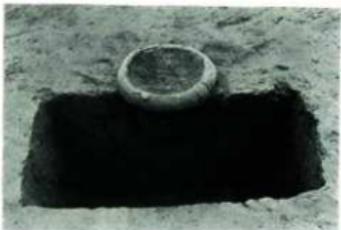


第14号住居跡



第1~3号墓葬全景

图版 8



第1号住居炉跡



第4号住居炉跡



第5号住居炉跡



第6号住居炉跡



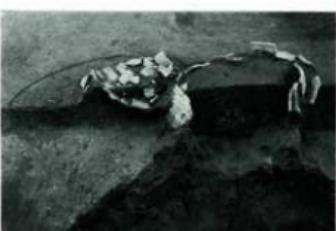
第8号住居炉跡



第10号住居炉跡



第13号住居炉跡



第14号住居炉跡

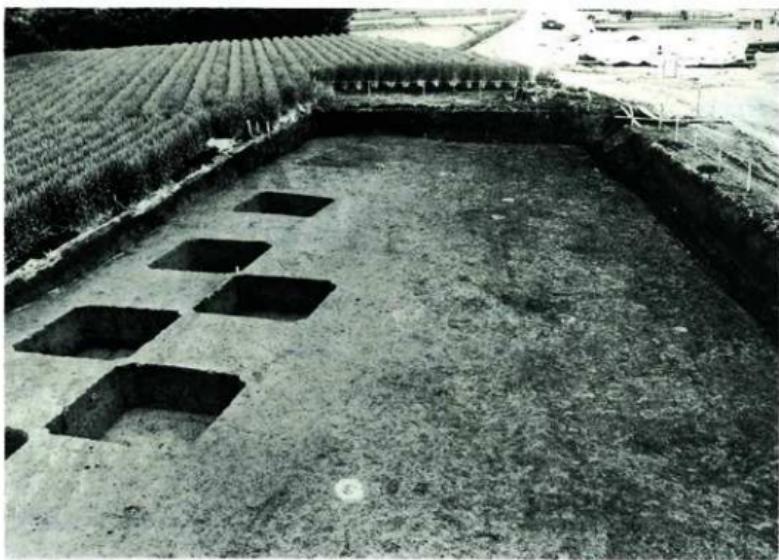


丸山遺跡 A 区全景

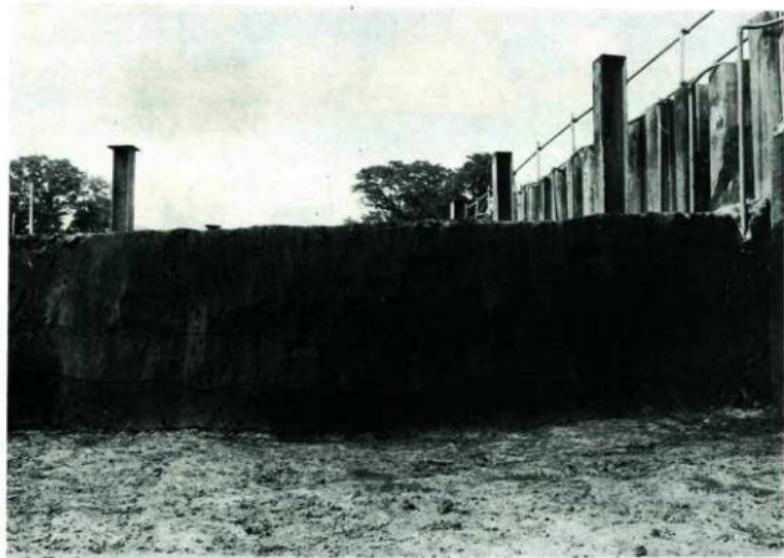


丸山遺跡 C I、II 区全景

圖版 10



丸山遺跡C—V区全景



丸山遺跡C区眉序

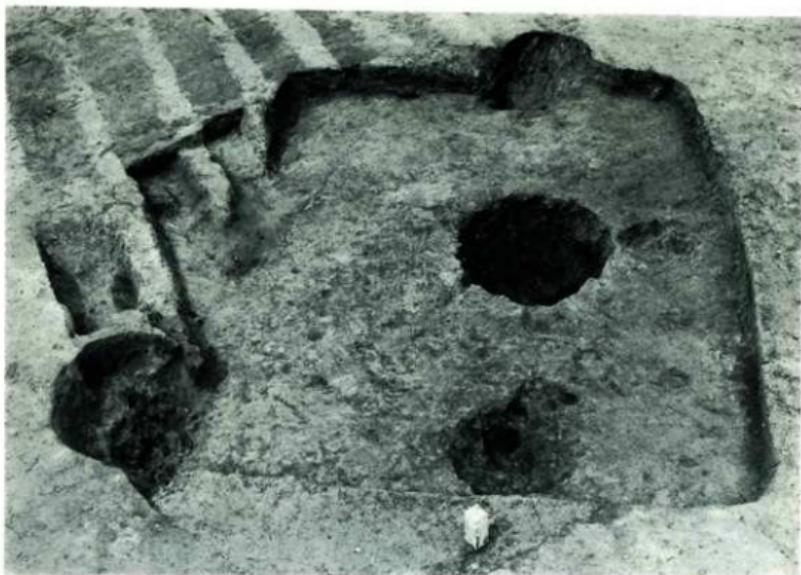


丸山遺跡1、2号溝

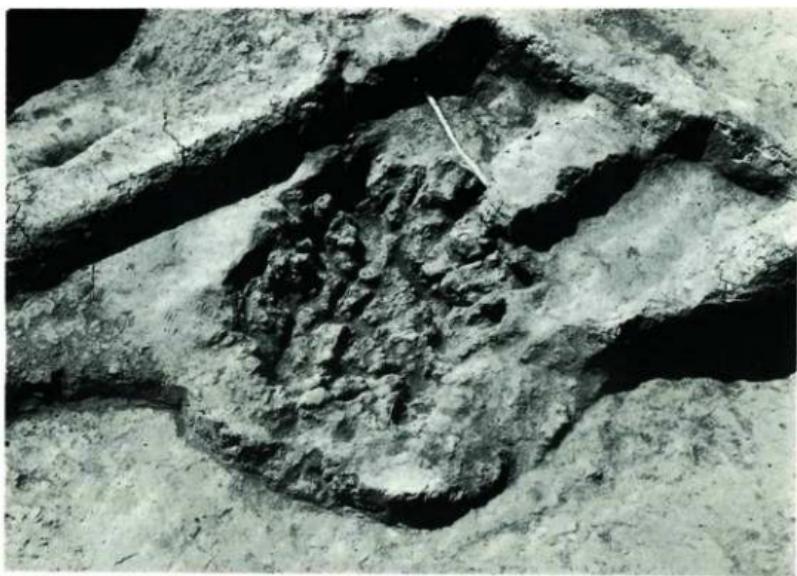


丸山遺跡20号溝

图版 12



丸山遺跡第1号住居跡



丸山遺跡第1号住居跡竪



1



2



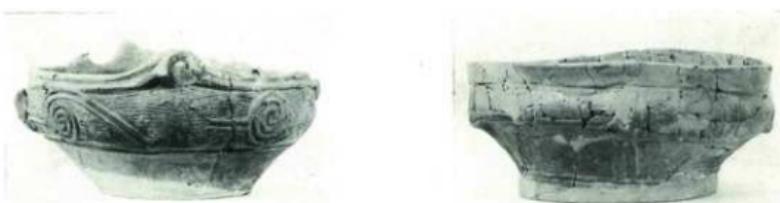
4



3



5



6



7

原遺跡出土土器 1、2（第1号住居跡） 3～5（第3号住居跡） 6（第4号住居跡） 7（第5号住居跡）

图版 14



1



2



3



4



5



6



7

原遗迹出土土器 1、3（第6号住居跡） 2、4（第8号住居跡） 5～6（第10号住居跡） 7（第13号住居跡）



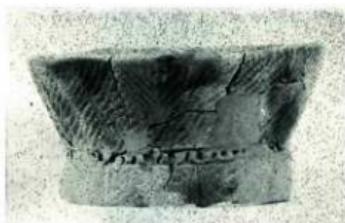
1



2



3



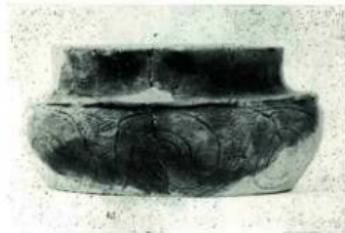
4



5



6

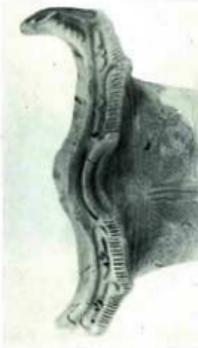


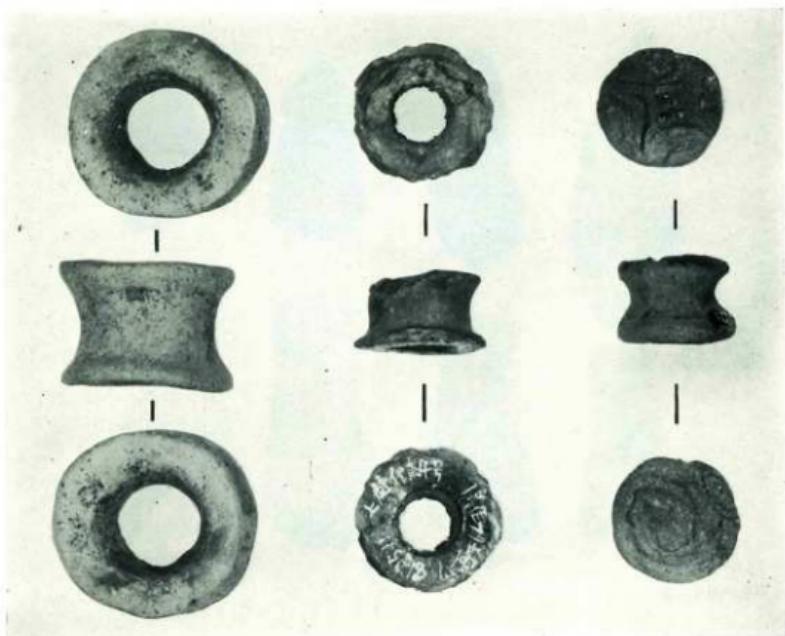
7

原遗迹出土土器 1~5 (第13号住居跡) 6~7 (第14号住居跡)

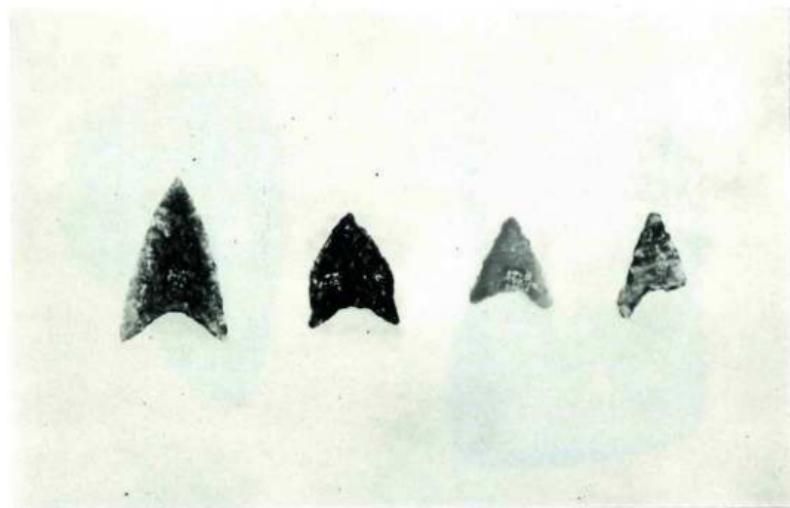


土器腹圈写真 第8号住同款(1) 第13B号住同款(2)



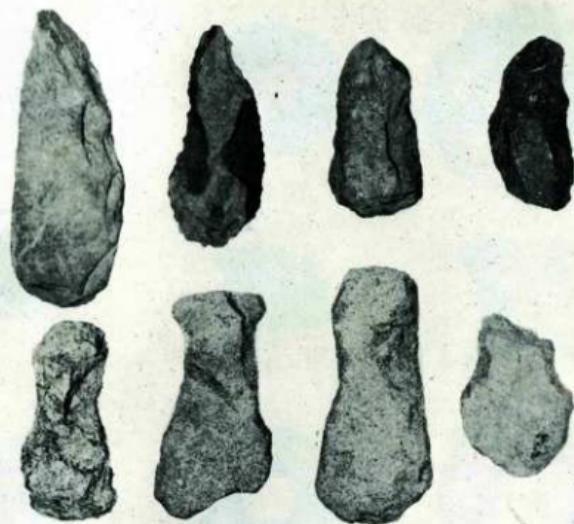


原遺跡出土土製品

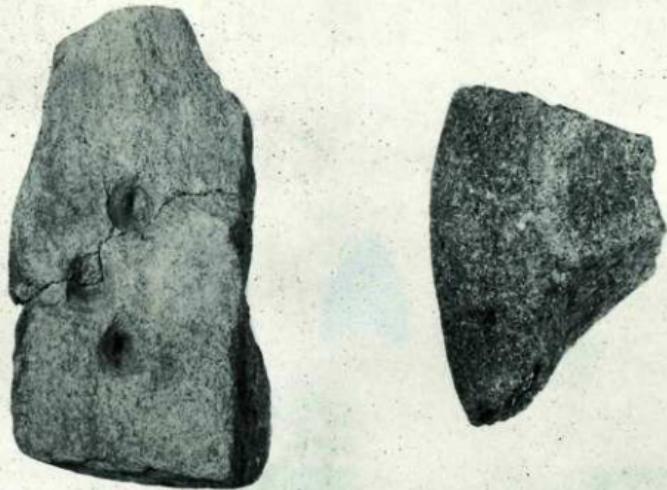


原遺跡出土石器

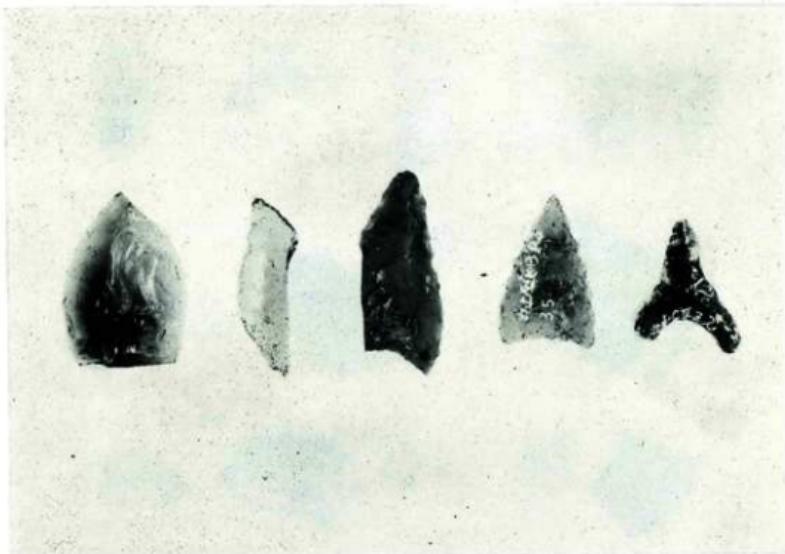
圖版 18



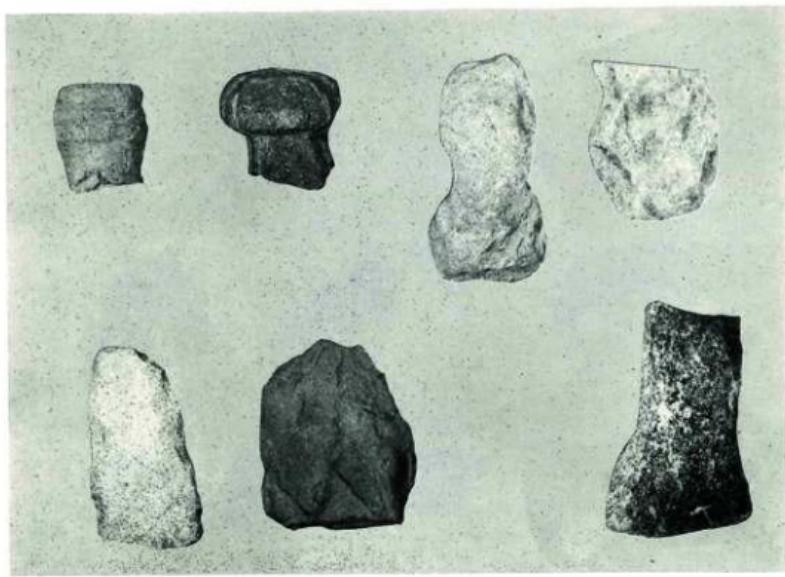
原遺跡出土石器



原遺跡出土石器

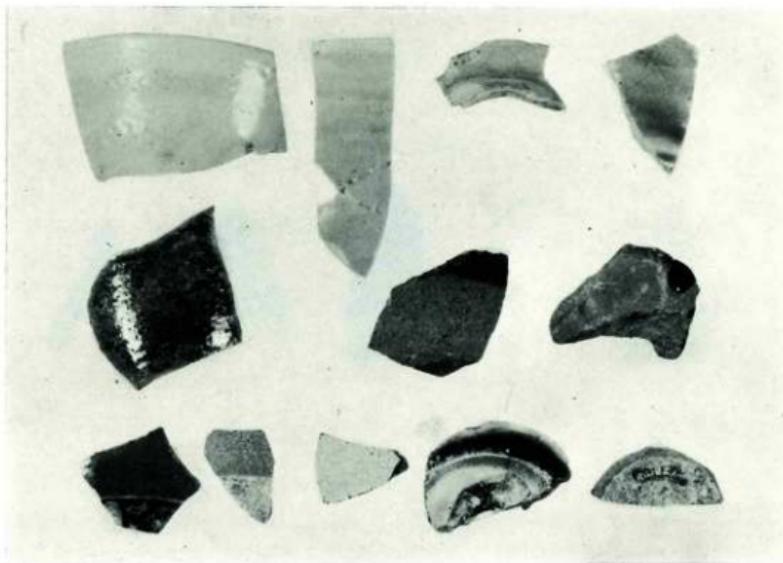


丸山遺跡出土石器

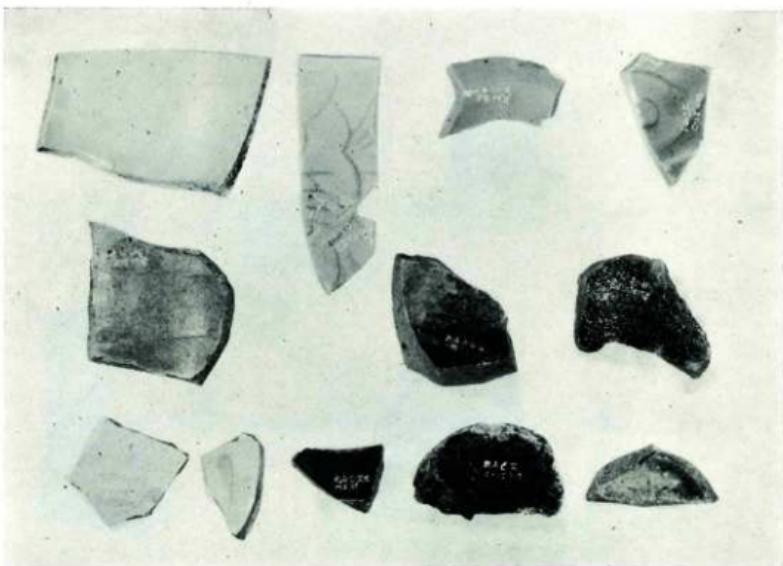


丸山遺跡出土石器

圖版 20



丸山遺跡出土陶磁器(表)



丸山遺跡出土陶磁器(裏)

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第42集

原・丸山  
上越新幹線埋蔵文化財調査報告

— II —

昭和60年3月20日 印刷

昭和60年3月30日 発行

発行 財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
〒330 大宮市柳町2-499

電話 (0486) 52-2231

印刷 有限会社 山陽印刷  
〒336 大宮市峰岸83  
電話 (0486) 24-6913

